

令和2年度

地域活性化事業

(実践型地域活動事業)

実施報告書



大学等による「おおいた創生」推進協議会

大学等及び学生の力を活かし 大分地域の活性化を目指します

目 次

- 1 ごあいさつ
- 2 令和2年度 実施事業一覧
- 4 実践型地域活動事業 実施成果
- 28 実践型地域活動事業
参加学生アンケート 集計結果
- 30 地域活性化事業報告会(成果報告会)
及び優秀賞者発表
- 32 実践型地域活動事業のひとこま





ごあいさつ

大学等による「おおいた創生」推進協議会
高等教育活性化部会長

日本文理大学 副学長

島岡 成治

大学等による「おおいた創生」推進協議会 高等教育活性化部会では、大分県内の地方自治体、産業界等との連携を図りつつ、進学者確保や地域課題の解決等を協働して行うことで高等教育の活性化ひいては地方創生につなげることを目指し活動を行っています。今年度も、大分県よりご支援をいただき、地域活性化をテーマとした学生の地域活性化事業（実践型地域活動事業）を実施することができました。

今年度は、コロナ禍のなか、感染予防に努め工夫しながら事業を実施してまいりましたが、オンラインによる意見交換等アイデアをブラッシュアップする機会を作ることが難しかったり、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う健康上の不安から、活動への参加が思うようにできなかった学生がいることは大変残念です。

実践型地域活動事業は、活動を通じて学生が地域課題に気づき、課題解決を図ることで地域に貢献すること、学生との交流を通じて地域が活性化すること、また、学生の地域への愛着を深めることを狙いとしています。

本年度は、5つの大学等において24の事業を実施し、約430名の学生が参加、県内の様々な地域に出向き、地域の実情を知るとともに、課題解決に向けての提案や行動を実施しました。地域の課題は、限られた期間の活動だけで解決できるものは少なく、長期的・継続的な支援や活動が必要であったり、学生が地域の中で解決行動ができる人材として育てていくことで将来的な解決につながったりするものなど、様々なものがあります。本事業での学生と地域との交流が課題解決への一歩となることを願います。

今後も大学等が連携し、大分地域の活性化に向けて活動していきたいと考えております。本事業の実施にあたり、ご協力、ご支援いただいた地域の皆様、関係者の皆様に心より御礼申し上げますとともに、引き続きのご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和2年度 実施事業一覧

大学等の教員が企画し、学生と共に地域に直接出向き、地域課題等の解決を図る事業です。
この活動を通じて学生が地域課題に気づくこと、課題解決を図ることで地域に貢献すること、
学生との交流を通じて地域が活性化すること、また、学生の地域への愛着を深めることをねらいとしています。

No	申請大学等	事業名	申請者	関連地域	頁
1	日本文理大学	過疎化・高齢化地域の観光まちづくりにおける交通問題の検討—宇佐駅を核としたシェア・モビリティ事業の展開—	経営経済学部 教授 永松 昌樹	宇佐市 豊後高田市	4
2		避難所の間仕切りシステム開発・制作ワークショップ in 杵築	工学部 教授 近藤 正一	杵築市	5
3		建築学生のモノづくりによる大野町「ふるさと体験村」の魅力創出プロジェクト	工学部 教授 吉村 充功	豊後大野市	6
4		舞子浜緑地リビング化プロジェクト	工学部 助教 木村 智	大分市	7
5		地方創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト	工学部 教授 小島 康史	大分市	8
6	別府大学	島しょ地域における水産物の多角的視座による付加価値の創造（中小養殖業者による水産物のブランド化）	食物栄養科学部 講師 大坪 史人	佐伯市	9
7		玖珠町活性化のための玖珠町産大麦の認知拡大・利用拡大プロジェクト	食物栄養科学部 准教授 梅木 美樹	玖珠町・別府市	10
8		野津原方言調査会と学生との学術的交流機会の創出～『野津原方言集』1～15巻の電子テキスト化による大分方言のオノマトペ研究を通じて～	文学部 教授 松田 美香	大分市(野津原) 別府市	11
9		大学と駅と地域デザイン 写真をとりたくなる駅プロジェクト（別府駅）	文学部 教授 安松 みゆき	別府市	12
10	別府大学 短期大学部	発酵を利用した新規加工食品の開発	食物栄養科 教授 岡本 昭	津久見市	13
11	別府溝部学園 短期大学	おんせん県おおいた 魅力発信コンシェルジュ養成啓発事業 九重発！ 大自然と里山に沸く温泉を満喫	食物栄養学科 特任准教授 安達 美和子	九重町	14
12		「豊の七瀬柿」PR大作戦	食物栄養学科 准教授 土谷 知子	大分市 (野津原地区)	15



No.	申請大学等	事業名	申請者	関連地域	頁
13	別府溝部学園 短期大学	おおいたのもったいないを考える。～SDGs持続可能な社会の実現に向けて私たちができること～	食物栄養学科 教授 牧 昌生	大分市・別府市	16
14		大友宗麟ゆかりの西洋文化とその後の行方 ～長崎・生月島の祈り“おらしょ・歌おらしょ”から豊後キリシタンの実態を探る～	幼児教育学科 准教授 松尾 佳保 食物栄養学科 准教授 土谷 知子	竹田市 豊後大野市 (朝地町)	17
15		大分の輪を広げよう ～給食施設で地産地消を取り入れるためのレシピ開発～	食物栄養学科 教授 望月 美左子	大分市 別府市 宇佐市 外	18
16	大分大学	高校・大学・自治体連携および文理融合による交通まちづくりプロジェクト—豊後大野市三重町駅前活性化と公共交通通学促進にむけて	経済学部 教授 大井 尚司 理工学部 助教 姫野 由香	豊後大野市	19
17		小学生のためのプログラミング教室 in 日出町	教育学部 教授 市原 靖士	日出町	20
18		きたく部2020新展開	教育学部 准教授 清水 良彦	大分市 (植田地区)	21
19		県産木材を利用したものづくりワークショップの実践	教育学部 准教授 中原 久志	大分市	22
20		のつはる天空広場活用プロジェクト (高度化教養科目① 地域ブランディング)	理工学部 教授 井上 高教	大分市 (野津原地区)	23
21		「道の駅ゆふいん」の改修にともなう地域活性化機能の強化プロジェクト (高度化教養科目① 地域ブランディング)	理工学部 教授 岩本 光生	由布市	24
22		無線センサを用いた圃場モニタリング	理工学部 教授 大竹 哲史	臼杵市 (野津町)	25
23		大分市域における新たな観光スタイルを提案する観光支援ツールの構築	理工学部 助教 賀川 経夫	大分市	26
24		大分観光バーチャル体験プロジェクト2020	理工学部 教授 古家 賢一	由布市	27

大学等による「おおいた創生」推進協議会 地域活性化事業（2020）

過疎化・高齢化地域の観光まちづくりにおける交通問題の検討

— 宇佐駅を核としたシェア・モビリティ事業の展開 —

永松昌樹（日本文理大学） 大坪史人（別府大学）

1. 本事業の目的

交通問題に対する地域住民の方々の意識には観光と生活の区別はない。移動方法というもっとも人間的な生活を営む上で必須の道具は自動車や自転車、列車やバス、物流で必需のトラックなどのクルマであり、生活の延長上に観光があるという考え方である。コミュニティーバスが整備されているが、“思い立った時に利用できるという自由が阻まれること”が少なくないために、多くの地方に住む高齢者は運転免許の返納に応じない。観光客と生活者の区別をなくし、生活者が普段使いをすることによって、観光で活用しきれていない資源を有益に使用できる方法を考えることは、観光による訪問者と生活している住民との距離を縮める方策にも繋がる。

2. 取り組みの内容

事業①「超小型モビリティ体験と豊後高田市市街地から宇佐駅までの資源活用のアイデア想起」

事業②「自転車活用の移動実験；宇佐駅から15分圏内の観光資源と生活資源の発見とアイデア想起」

事業③「学生によるプレゼンテーションと住民との討議」

事業④宇佐市東ふれあい会館（宇佐駅前：旧北馬城地区公民館）での発表会：令和2年12月8日（火曜日）

「宇佐駅を核としたシェア・モビリティ事業の展開」と題した学生の発表会

事業⑤反省会「事業化に向けて」

3. 事業の成果

事業参加のべ人員 35名の学生たちは、地域住民の方々と協創的事業①～⑤を通じて「地元のヒトたちとの生活を体感するからこそ、地域のウリ、つまり“魅力”となるアイデアが生まれ、その良さを発見できる。そして、宇佐駅を乗降する観光客への“おもてなし”や生活者が望む宇佐駅の再生・

創生に繋がる。」というコンセプトを見出し、3つの提案を行なった。

- “滞在”…個に特化した宿泊と自然への体感
- “移動”…スローな移動と食への体感
- “持続可能性”…フィールド・ミュージアムとしてのエリア整備による地域創生

地域住民の方々からは以下のようなコメントがあった。

- ◆ 地元の観光（地域）資源を活用して取り組みの成果を情報発信することで、地域の活性化につながる。
- ◆ これまでにはなかった学生の方と地域住民の接点が生まれた。

過疎化や高齢化の進むまちづくりの必要性に触れる機会を得られた学生たちも以下のように綴っている。

- ◆ 普段の学生生活では気づかない大分県の地域社会の課題がわかった。
- ◆ 地域の方々と一緒に生活圏を巡り、高齢者の方々の生活の不便さを学べた。

4. 本事業のまとめ

宇佐駅からの観光を計画する場合、市制の区別ほど無益で悩ましい問題はない。観光は点ではなく線である。訪問だけでなく、その途中にある発見も観光であり、特に滞在時間を延伸させる効果が得られる散策型の観光では、移動体がどのような道具を使うのかは、重要な選択となる。



建築学生のモノづくりによる大野町「ふるさと体験村」の魅力創出プロジェクト

1. 概要

日本文理大学 工学部 建築学科
指導教員：吉村 充功・池畑 義人・中西 章敦

豊後大野市大野町^{ほじ}土師地区は、大野町北部に位置し大分市と隣接した地区であるが、人口153人、82世帯、高齢化率67%（2015年国勢調査）と豊後大野市内で最も高齢化が進む小規模集落の一つである。

地区内には域外住民が訪れることのできる交流拠点施設として「ふるさと体験村」がある。この施設は、小規模ではあるが河川プールや竪穴式住居、ケビン、野外炊飯場などのキャンプ施設があり、特に夏場に家族連れが宿泊や日帰りで訪れることができる。元々は豊後大野市が直営していた施設であるが、維持経費の増大等を理由に2015年度から地域住民組織である「土師振興協議会」に譲渡され、地区住民の手による運営が続けられている。超高齢、人口減少に直面している本地区にとって本施設の運営、維持は簡単なことではないが、拠点が消失することによる交流人口の消滅が、地域の衰退に拍車をかけることになるとの想いから、運営管理を継続している。

そのような中、本学科とは2011年より1年生のボランティア活動（体験村施設や地区公民館周辺の除草、河川プールのペンキ塗りや田畑の手入れ等）を通じて地域住民との交流を深めてきた。また、上級生は毎年7月に行われる開村式の運営協力や企画立案を行ったり、体験村施設の改修（ウッドデッキやバーベキュー場の補修、五右衛門風呂の設置など）を学生自ら設計、施工することにより地域の魅力づくりの一翼を担ってきた。このような取組、学生との交流により、これまで地域の高齢化が進行する中でも、地域住民が地域に対する誇りを失わず、地域コミュニティの維持を果たしてきた。

しかしながら、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、同地区を訪れる域外者は宿泊が半減し、日帰りが増加するなどその利用のされ方が大きく変化している。また、開村式や同地区で夏に行われる「しはら湖面火まつり」が中止になるなど、交流人口の減少に対する危機感が強い。同地区にとって、交流人口が失われることは地域コミュニティが急激に衰退することを意味しており、with/afterコロナを見据えた新たな魅力創出、集客できるコンテンツの創出が期待されている。

本事業では、課題を抱える対象者である土師振興協議会と連携して、建築学科学生であることを生かし、「ふるさと体験村」に安心して訪れ、楽しむことができる新たな集客コンテンツ（学生たちが製作できる設置型の遊具や簡易な交流設備等を想定）を学生視点で考え、それを学生チームで設計から施工までの一連の建設工程を地元関係者の協力を得ながら実践し、魅力創出するとともに、集客力強化策の提言、実現につなげることを目的とした。



2. 参加学生・協力者

【プロジェクト参加学生】建築学科3年：24名 4年：3名

【地元協力者】○ 土師振興協議会

3. 実施日程・内容

◎は現地、○は学内

【モノづくり製作（建設マネジメント実習）】

- 11月5日（木）オリエンテーション
地区住民の要望に応え、アスレチック遊具製作、ケビンデッキや竪穴式住居前の階段の掛替えなどをテーマに4チームを編成
- ◎11月7日（土）現地下見・地区住民との意見交換・測量
- 11月12日（木）～12月3日（木）設計図・積算・資材調達表の作成
- 12月10日（木）施工計画の作成
- 1月7日（木）施工準備（資材の確認・必要な事前加工、備品準備）
- ◎1月10日（日）・11日（月）本施工
- 1月14日（木）原価計算、ふり回り

【集客強化策の提案（プロジェクト3（環境・地域創造演習））】

- 11月27日（金）オリエンテーション
- 11月27日（金）～12月11日（金）RESAS 地域経済分析システムや過去のフィールド調査結果等を用いた情報収集、地域課題整理
- ◎12月12日（土）フィールドワーク（4チームに分かれ現地調査）
- 12月18日（金）～1月22日（金）
集客強化策・情報発信策等の検討、コンテンツづくり、成果発表準備
- ◎1月24日（日）成果発表会
- 2月5日（金）ふり回り

4. 学生成果物

- ①丸太渡り（遊具）
- ②ケビン前階段設置
- ③竪穴式住居前階段設置



- ④ケビンデッキの掛替え
- ⑤地区探索マップの作成
- ⑥地区紹介Webの作成



【集客強化策の提案（プロジェクト3（環境・地域創造演習））】

- ①住民ヒアリングの様子
- ②成果発表会の様子
- ③成果発表会遠景



6. まとめ

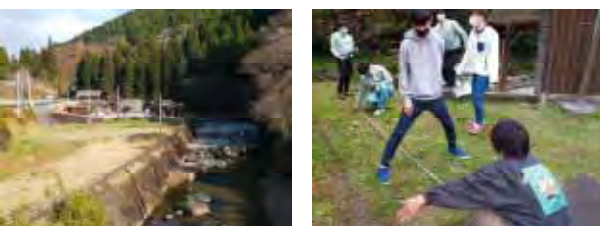
本事業の実施により、体験村に子どもたちに楽しんでもらえる新たなアスレチック施設の設置や老朽化した階段等の掛け替えを行うことができた。学生たちにとっては建設施工の一連の体験が出来たとともに、地区住民に喜ばれ専門性で地域貢献できる達成感を味わうことができた。

また集客強化策の検討では、地区で滞在化できない観光資源を周遊化するためのマップやWebの作成ができ、地区住民からはこれまで地区で解決できなかった課題を解決するよい取り組みであったと高く評価された。

5. 取り組みの様子

【モノづくり製作（建設マネジメント実習）】

- ①ふるさと体験村遠景
- ②設置場所の測量（現地下見）



- ③階段設置の施工の様子
- ④地域住民からの指導の様子



- ⑤遊具の基礎施工の様子
- ⑥デッキの施工の様子



- ⑦遊具設置の施工の様子



舞子浜リビング化プロジェクト

概要

本事業は「舞子浜リビング」という2019年6月に第1回、2020年10月18日に第2回が開催されたイベントに参加し、大分商工会議所大在支所と一緒に、地域住民に対してイベントの周知や、会場である舞子浜緑地の認知度アップを目的としている。イベント会場の舞子浜は以前別府湾に面しており、海苔の養殖場や海水浴場として、大在地区の住民生活の一部になり親しまれていた。しかし、大分地域の新産業都市の指定以降に埋め立てられ、かつての賑わいは見られない。そうした状況を踏まえ協力事業所は「舞子浜をみんなのリビングに」というスローガンを掲げ、舞子浜を盛り上げている。それに対して、参加学生は下記の検討等を行っている。

- (1) 学生がイベントの実行委員会に参加して、協力者から問題点・課題・要望を確認
- (2) 協力者の要望に対してイベントの企画・実施とランチ提供場所の設計・制作・設置
- (3) 地域活性に向けた大在地域内でのワークショップ等の企画・実施



舞子浜リビング当日の様子

プロジェクトメンバー

日本文理大学工学部 助教 木村智
日本文理大学工学部 学部4年7名 / 3年8名 / その他3名
大坪真子、岡林海叶、後藤将悟、佐藤君徳、
柴田啓生、高柳翔、加藤勇磨 (4年生)
大河内一希、坂本昇陽、高市旺李、橋本拓磨、
馬場日向子、宮内棟伍、ZHAO GUOYAN (3年生)
【地元協力者】大分商工会議所大在支所、大在公民館



フレーム仮組み立て後の4年生



舞子浜緑地での集合写真

活動の実施状況

- 舞子浜リビング実行委員会への参加学生の参加
(①2020年6月25日、②8月25日、③9月10日、
④9月28日、⑤10月14日、⑥11月18日開催)
- 大在西小学校の学生と竹ドーム制作&装飾ワークショップと告知用展示 (WS/10月12日、展示/10月26日まで)
- イベント時に学生指導の元で竹ドーム制作 (10月18日)
- 舞子浜フレームをランチ小屋としての利用 (10月18日)
- フォトフレームとしての利用 (10月18日-10月26日)
- 大在幼稚園に竹ドームの設置 (10月26日-11月13日)



実行委員会での学生達の提案の様子



大在公民館での竹ドームWSの様子



大きな竹ドームの制作の様子



舞子浜フレームをランチ小屋として利用



イベント後のフォトフレーム利用



大在幼稚園にて園児の遊具として利用

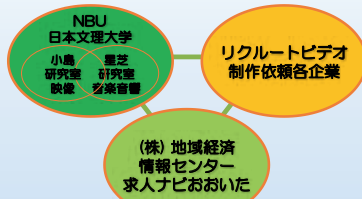
事業の地域への成果

本事業を通じて参加学生が舞子浜緑地を見学して現状の課題を知るなど、自分たちが活動している範囲にある地域資源の一端を認識することが出来た。もっと舞子浜緑地を活用していきたいという意見が学生達から出るなど、この緑地帯が持つ魅力も発見している。また、イベント後舞子浜フレームでの写真展示や大在公民館に竹ドームの設置をしたところ、見学者からコメントを頂く機会があった。この様に本事業が大在地区を中心にイベントの周知や地域活性に貢献したと思われる。

『地方創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト』

日本文理大学 工学部 情報メディア学科 小島 康史・星芝 貴行 研究室
株式会社 地域経済情報センター（求人ナビおいた）

●事業の目的：現在、新入社員の3年以内の高い離職率（大卒30%以上、高卒・短大等卒40%以上、中卒60%以上：厚生労働省サイトより）と、多くの学生の地元を離れ都心部への就職を希望する問題点が挙げられる。本プロジェクトは今年度で4年目の取り組みであり、「雇用のミスマッチの軽減」、「若者の地元の定着率の向上」、「地元大学等から地元企業への就職率の向上」を目標とし、地元企業の魅力を発信する、「学生目線」によるプロモーション動画「リクルートビデオ」の制作を目的としている。



本プロジェクトの取り組み体制

●事業の内容：課題を抱える対象者は、若者が求める企業情報を得て、その情報発信が遅れがちな、地方の中小企業である。就職活動を行う学生側が得たい情報と、企業側が発信したい情報には乖離が見られる。通常、求人のための情報発信として制作するWebページや、そのページ上に掲載あるいは説明会で使用する動画、企業と動画制作の専門業者が行う。Webページやリクルートビデオにおける会社側の発信する情報の多くは、「社長・会長の挨拶」、「社是・社訓・経営理念」、「会社全体の業務内容（トップダウン型の説明で入社後の自分が携わる仕事が見えてこない）」等が挙げられる。実際に就職活動を行う学生が得たい情報は、「入社後の自分の姿（社内の雰囲気を含め）」、「数年後の自分が成長できるか」（教育・研修体制）、「事業の安定性や給与・待遇の良さ」（やりがい、実力次第での昇給を含め）等であることが、3年間続けてきた本プロジェクトからわかった。本プロジェクトでは「学生目線」を重要なキーワードとしており、学生自身が企業に対して就職活動を行う際に実際に知りたい情報を引き出し、その情報を元に企画書と絵コンテを作成し、企業側への企画の提案（プレゼンテーション）を行い、「リクルートビデオ」の制作を行う。

●事業の成果：今年度、制作した各企業のリクルートビデオとその「学生目線による演出」を次の表に示す。これまで、学生らが制作したリクルートビデオにおける演出では、「給与制度の明確化」、「資格取得や指導体制」、「働き甲斐」、「福利厚生」等が多く取り入れられていた。今年度もこれらの演出を含んだ企画書が学生から提案され、各企業の承諾を得てリクルートビデオの制作に取り組むことができた。

制作	企業名	制作動画
2017年度	株式会社 臼杵鋼板工業所 http://www.usuki-kouhan.co.jp/	
	株式会社 熊野建設 http://kumanokensetsu.jp/	
	株式会社 双葉タクシー http://www.futabataxi.jp/	
	株式会社 トキハイナドストリー https://www.tokiwa-industry.co.jp/	
2018年度	仲道トーヨー 株式会社 http://nakamichi-group.com/	
	社会福祉法人 庄内厚生館 http://www.kouseikan.jp/	
	三光建設工業 株式会社 http://sansaneanko.jp/	
	株式会社 大谷商会 http://www.otani88.com/	
2019年度	株式会社 大和電業社 http://www.d-yamato.jp/	
	株式会社 ハヤシグリーンテクノ https://h-gt.co.jp/	
	大分太平洋鮎業 株式会社 http://oita-taiheio.sakura.ne.jp/	

企業名	制作ビデオ	学生による演出
株式会社 光建エンジニアリング http://www.kouken-eng.jp/		<ul style="list-style-type: none"> 会社概要（勤務地・従業員数を含む）を紹介する。 業界では珍しい、民間や県外からの請負業務を紹介する。 業務内容（PCでの図面作成、紙面での書類制作等）を紹介する。 取引先のインタビュー（経験豊富で技術がある等）を紹介する。 若手社員のインタビュー（社内環境の良さ、やりがい、先輩と一緒に自分で考えながら成長できること、ドローン等の新事業への参加等）を紹介する。
株式会社 地域科学研究所 https://www.chklab.com/		<ul style="list-style-type: none"> 地方では珍しい、ワンフロアの社内を紹介する。 事業である「地域の課題の解決」を、Before/After画像で紹介する。 学生に魅力的と思われる2つの職種（GIS：地理情報システム、まちづくりディレクター）について、インタビューを含め紹介する。 外部からの評価を、大学教授のインタビューで紹介する。 福利厚生（社員旅行、看護休暇、産休育休サポート等）を紹介する。
東洋技術 株式会社 https://www.toyogijutu.co.jp/		<ul style="list-style-type: none"> 新入社員の動向を伺いながらの人材育成の取組みについて紹介する。 資格取得と伴う手当（受験時の費用負担、毎月の給与のアップ）、毎月の勉強会の実施について紹介する。 福利厚生について、時間単位の有給取得、社内リクリエーション、会社負担の親睦会、社員旅行（5年に1回の海外旅行）、女性社員に向けた育児休暇の取得のしやすい環境づくりを紹介する。

島しょ地域における水産物の多角的視座による付加価値の創造

別府大学 食物栄養科学部 発酵食品学科
大坪史人 陶山明子
角町のぞみ

1. 実施背景

1980年代以降、食の簡便化が進み、市場構造が変化し、消費地市場において加工され切り身や刺身などで販売されるようになった。しかし、主要産地では、1990年代半ばからのデフレ経済と消費地加工の採算性が低下したこともあり、産地加工が急速に進んでいる。また、このような産地流通加工企業の多くは、国内の需要の縮小に対応するために輸出に積極的である。



しかし、中小養殖業者や水産加工業者による輸出は難しい、この孤立分散的な養殖業者によるブランド化がなされていない生産物の販売対応に課題がある。

2. 目的

加工技術が必要としない生産段階での養殖ブリの差別化および販売対応について、学際的な手法により検証し、佐伯市蒲江地区の養殖業の発展の一助とする。

3. 概要

- 実施期間：11月10日～1月14日
- 実施場所：道の駅かまえ、別府大学
- 連携団体：(株)蒲江創生協会、蒲江地区の養殖業者4社
- 協力団体：大分県漁業者連絡協議会、大分県漁業協同組合、大分県農山漁村振興部
- 参加学生：別府大学地域社会フィールドワーク演習受講者および大坪研究室学生 計22名



4. 取り組み内容の紹介

- ①水産業、大分県水産業に関する基礎的な知識を学ぶ
- ②現地での見学から地域における課題を見出す
- ③その課題に実験を用い、科学的な視点での情報を得る
- ④実験情報を基に、マーケティングの目線から検証する

水産経済

食品分析

マーケティング

学際的な融合により地域に活力を！！

グループワーク

- 水産物の生産・流通および消費の動向および水産業における地域課題について学ぶ
- 「佐伯市」、「ブリ」、「養殖と天然」に関する意見出し

現地見学

- 生産や販売面における課題を把握
- 官能調査により味や風味等の違いを科学的に解析する意義を認識

実験

- 味覚センサーにより(甘味、旨味、塩味、酸味、苦味)基本5味の分析

ディスカッション

- 実験データの活用を基にSWOT分析・クロス分析により事業環境をリサーチし、販売や加工について検証

現地見学の様子



実験の様子



○官能調査・味覚センサー実験・マーケティング

天然ブリを基準として、蒲江産の3種類の養殖ブリについて官能調査・味覚センサーの結果から販売・活用方法を検討した。

(1) 官能調査

<方法>

- 噛み切りやすさ、プリプリ感、香り(生臭さ)、旨味、脂のり、水っぽさ、総合評価の7項目を5段階で評価した

<結果>

- 背より腹身が全体的に約0.5ポイント高い評価を得た。天然より蒲江産ブリが脂のりが良く評価も高い(蒲江ブリの優位性)。

背の評価



腹の評価



(2) 味覚センサー実験結果

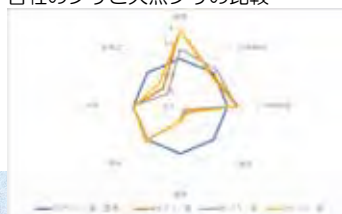
<方法>

- 天然、A社、B社、C社のブリ(各背・腹)計8サンプルを各80gを分取し、純水320gにてミキサーで1分間細切した。その後高速大容量冷却遠心機7780にて3,000rpm/10minで遠心分離を行い、上澄みをろ過した後、検体①とした。
- 各検体①を1/3基準液にて20倍に希釈し、検体②とし、これを味認識装置SA402Bを用い、旨味成分の吸着による脂質膜の膜電位変化を測定した。

<結果>

- すべての項目で味覚センサーにおいて有意性が得られた。
- 旨味、苦味雑味、旨味コクにおいて、人が味を感じる領域で、ほかの項目については無味の領域であった。
- 官能調査の結果に反して、旨味に関しては脂が少なかった順に強いという結果になった⇒※データ反転の可能性あり、再検証の予定

各社のブリと天然ブリの比較



(3) マーケティングの視点からの食べ方の提案

<A社のブリ>

- 適度な脂質で味のバランスが良く「お刺身」で食べるのに最適!

<B社のブリ>

- 脂のりが非常によい。でもお刺身で食べるのは少レクドイ。グルタミン酸やイノシン産で旨味を高めてさっぱり食べられる「ブリしゃぶ」はいかが!

<C社のブリ>

- 脂が少ない反面、プリプリとした身に特徴があり。なので食感を生かしながら買った食べ方で、「ブリの生ハム」にしてみたらおいしそう!!

玖珠町活性化のための玖珠町産大麦の認知拡大・利用拡大プロジェクト

別府大学 / 食物栄養科学部 准教授 梅木 美樹



玖珠町活性化のための玖珠町産大麦の認知拡大・利用拡大プロジェクト

別府大学(食物栄養学科、発酵食品学科、国際言語・文化学科)

目的

別府大学では、平成29年度より、玖珠町で栽培された大麦を用いた地域活性化に取り組み、レシピ開発や商品開発を通じて玖珠町産大麦の認知度の向上と利用拡大を推進してきた。その結果、認知度は少しずつ向上しているがまだ十分ではないという課題があった。また、大麦を粉にした大麦粉の販売が伸び悩んでいるという生産者・販売者の課題があった。そこで本事業では、玖珠町産大麦の認知拡大・利用拡大を目的とし、玖珠町産大麦粉の商品化の取り組みを行うこととした。今回は、大分県立玖珠美山高校との高大連携を軸とした商品開発、企業および大学内の分野間連携を軸とした商品開発を行った。

活動体制

【連携企業・自治体等】

一般社団法人玖珠レーベル、株式会社粉工房さ
大分県立玖珠美山高等学校、玖珠町役場

【参加学生】

秋吉マヤラ千夏、麻生葉、大久保梨奈、岡祐希、河野彩乃
平本悠里、大塚結風、千住果穂、溝口美華
進亮吾、佐藤洗希、潮平渚、田中夢乃、牧光佑、柳田慎之佑

【参加教員】

高松伸枝、仙波和代、浅田憲彦、陶山明子、梅木美樹
根之木英二

事業内容

＜対象者との交流の実施＞

課題対象者との交流については、玖珠美山高校との高大連携を通じた地域住民との交流(2020年11月1日)、大麦の生産者および販売者との交流(2020年9月上旬～中旬)を実施した。



玖珠美山高校生との交流



地域住民との交流

地元の高校生や地域住民の声を直接ヒアリングしたことで、玖珠町産大麦についての認知度や玖珠町の地域の現状についての課題を認識する機会となった。



販売者との交流

販売者からのヒアリングにより、大麦粉の消費が伸び悩んでいる課題を再認識した。また、大麦粉を使用した商品やレシピを作って欲しいとの要望を聞くことができた。

＜高大連携を軸とした商品開発＞

➢ 玖珠町内の店舗で販売する商品の開発

玖珠美山高校と共同開発したシフォンケーキ「もちふわ大麦シフォン」の商品化にむけて味のバリエーションの検討を行った。別府大学では、カボス味、玖珠美山高校ではブルーベリー味のシフォンケーキを試作した。

カボス味は、「道の駅みえ」でのプレ試食会を実施した(2020年8月23日)。また、テクスチャー評価や味覚センサーなどの機器分析を行い商品のアピールポイントを明らかにした。今後は「道の駅くす」での販売を目指したいと考えている。

ブルーベリー味は、玖珠町内のカフェ「Pompon chouchou -花と菓子と-」で試験販売を実施した(2020年10月26日)。シフォンケーキ以外にも「くすむぎチーズケーキ」のレシピ改良を行なった。

シフォンケーキのテクスチャー評価

	中麦シフォン	中麦シフォン	中麦シフォン	中麦シフォン	中麦シフォン
ふわふわ	1.00 ± 0.08	ふわふわ	0.98 ± 0.11	ふわふわ	1.01 ± 0.04
もちもち	0.96 ± 0.17	もちもち	1.00 ± 0.10	もちもち	1.15 ± 0.15
弾力	0.52 ± 0.11	弾力	0.80 ± 0.15	弾力	0.75 ± 0.11
こし	0.22 ± 0.16	こし	0.23 ± 0.04	こし	0.08 ± 0.04
弾力比	0.90 ± 0.01	弾力比	1.02 ± 0.04	弾力比	1.23 ± 0.07

カボス味のシフォンケーキ



「Pompon chouchou」での試験販売の様子



くすむぎチーズケーキのレシピ改良の様子と試作品

＜企業および分野間連携を軸とした商品開発＞

➢ 大麦うどんの商品開発

大麦粉の利用拡大につながる商品として、卒業研究でレシピ開発をしていただくを選び商品化に着手した。

株式会社粉工房ささと連携を図り、原料の粉に対する大麦粉の配合割合の検討を行った。味、価格、製造のしやすさなどの観点から検討を重ね、大麦粉の割合は20%とした。また、商品名を「つるつるもち麦うどん」とした。現在、量産化にむけて試作を継続している。パッケージのデザインは、国際言語・文化学科との分野間連携により作製した。学生が玖珠町について調査し、玖珠町の魅力を取り入れたパッケージデザイン案10種類の中から2作品を採用し、完成させた。



パッケージデザインの打ち合わせの様子



採用されたパッケージデザイン2作品と「つるつるもち麦うどん」

まとめ

玖珠町産大麦の認知拡大・利用拡大を目的とし、玖珠町産大麦粉を使用した商品開発を行った。玖珠美山高校との高大連携を軸とした商品開発では、「もちふわ大麦シフォン」のプレーン以外の味のバリエーションの検討を行い、カボス味とブルーベリー味を完成させた。企業および大学内の分野間連携を軸とした商品開発では、「つるつるもち麦うどん」を開発した。学生が様々な連携を通して開発したこれらの商品により、消費者が玖珠町産大麦を目にする機会が増えること、おやつや主食として家庭の食生活に取り入れることが可能になり、玖珠町産大麦の認知拡大・利用拡大につながると考えられた。

野津原方言調査会と学生との学術的交流機会の創出

～『野津原方言集』1～15巻の電子テキスト化による大分方言のオノマトペ研究を通じて～

発表者：松田 美香（別府大学文学部）
安東蓮、犬山鈴奈、桑原彩斗、宮西真生
（国際言語・文化学科2年）

1. 実施の経緯

大分市野津原地域の有志による『野津原方言集』（野津原方言調査会編）35巻（前・後・こぼればなし等含む）

- ・手刷りである。自費出版である。電子記録されていない。→電子化を思い立つ。
- ・事務局長の佐藤源治氏に相談したところ、快諾を得られた。
- ・PCスキルの高い大学生なら電子化作業が可能。
- ・学生は、生きた方言を学べる機会。調査会の方々は世代間交流ができる。
→実施者が申請し、採択された。



2. 事業内容

学生と『野津原方言集』の電子化作業を行い、その過程で生じた疑問点や調査研究結果を野津原方言調査会の方にお伝えすることで交流を行う。

- ① OCRにかけたWord原稿とPDF原稿を照らし合わせて整形・修正をする作業
- ② 並行して、Wordのワークシートに方言の疑問点を記入する
- ③ 並行して、Excelのデータベースにオノマトペと感動詞を見つけて入力する

第1回交流会（令和2年11月26日）では、調査会の方に作業中に生じた疑問点についてお尋ねした。
第2回（令和3年1月21日）では、学生が調査した結果等の発表会としての交流会を行う予定である。

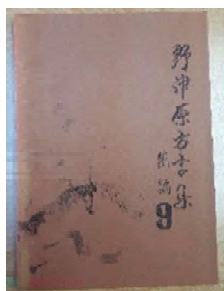
3. 成果

- 3-1. 『野津原方言集』12巻分の電子化データ（本文：OCRファイルおよびPDFファイルのセット）
- 3-2. 「野津原方言集データベース2020」（オノマトペと感動詞のデータベース：エクセルファイル）
- 3-3. 学生による調査研究

「人の心理や痛みなどの感覚を表すオノマトペ」…「ニッコリ」や「ぼろぼろ」などの多用
「野津原方言のオノマトペについて」…「ちかっと」「ひよかっと」「しゃならしゃなら」など
「ABAB型オノマトペについて」…「からから乾く」「泥手をサブサブと」「ガラガラ響く」など
「会話文の感動詞について」…呼び掛け・応答に分類されるものの使用率が高い
「オカチャンについて」…九州では母親をオカアチャンと呼ぶはず。オカチャンに違和感
他にも作業中の掛け声や方言のルール（「～て」→「～ち」、「～ない」→「ん」）についての調査研究

4. 課題と展望

新型コロナウイルス感染状況が改善しなかったため、予定していた対面の交流会が開催できなかったのは残念だった。将来的には、対面の交流会の実施し、全巻を完成させて大学HP上で一般利用ができるようにしたい。



手刷りの冊子



方言集の整形原稿例



事務局長の佐藤源治氏



11月26日Zoom交流会の様子

大学と駅と地域デザイン

写真をとりたいくなる別府駅プロジェクトの報告

別府大学 文学部国際言語・文化学科 芸術表現コース
企画デザイン・指導監修：長浜桂子（別府大学非常勤講師）
金 孝源（別府大学准教授）

制作した学生：2年/安東蓮 大野百恵 大前彩 小畑竜太
3年/川本舞 月脚麻里奈
4年/伊藤涼子 柏大輝 本島颯人 匹田楓子



目的：疫病退治『鬼』のアート作品で駅の利用者を元気つける取り組み

• Before → After



• 制作過程 (2)



3.制作過程

(9月)

大学内で組み立て
現場にて臨機応変に
対応し、多少の誤差も
カバーしつつ完成させた



• 制作過程 (1)



1. 講義で作品の鬼・デザインの提案 (6月～7月)

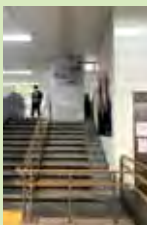
- ・ 2年生の発展演習で金准教授の指導のもと試案づくり
- ・ 大分駅長甲斐裕明氏（元別府駅長）に助言を得る
- ・ 助言を受けて実施案を長浜講師が指導



2. 準備

(8月)

- ・ 材料：カッティングシート スチレンボード 発砲ロール
- ・ 現場（デットスペース）の寸法を測定
- ・ 大学内での制作パネルやシール素材の切断 シールの貼り付け



- ・ 現場（デットスペース）での設置 作品の寸法を改めて設置

4. 完成

(10月)



• 評価・効果

実際にこの作品は改札口に入った場所に作られた。本来はデッドスペースになっていたが、今回のアート作品によって、足を止めて眺める人や撮影する人など、自分たちの作品に興味を持ってくれていると実感できた。

また、この作品の紹介としてテレビ（CTB、トンボテレビ）や新聞（大分合同新聞、今日新聞）にも取り上げられた。

• 総括

コロナウイルスによる不幸なニュースで公共施設や交通機関などの利用者が以前よりも減少している。このような状況をふまえて、今回のアート作品によって、利用者の気持ちが晴れるようにとの思いを持って制作した。新聞などにも取り上げられたことで、さらに地域の活性化につながる一助になればと考えている。

国際言語・文化学科 2年 小畑竜太



発酵を利用した新規加工食品の開発

別府大学短期大学部食物栄養科

地域が抱える課題と背景

1. 津久見市は**人口減少・少子高齢化**が進む。
2. 振興策として歴史、文化を生かした観光地域確立のための**ブランド化**があげられている。
3. 当地区は**豊富な水産資源**に恵まれており、水産物の付加価値向上、魚食の拡大が求められている。
4. このため、水産業と連携した食観光の推進として、「**津久見ひゅうが**」が**丼キャンペーン**「**津久見モイカフェスティバル**」を開催、成功している。
5. 新たな展開として、**水産物を利用した新たな発酵調味味噌**を開発する。

実施体制

MISOBA
味噌の試作指導
官能検査
現場の企画と展望

**津久見市観光協会
工房こひる**
地元調整
今後の展望

別府大学短期大学部
味噌の試作・分析
全体企画・学生指導

事業実施経過及び実施内容

- この事業を「**ととのみそプロジェクト**」と名づけスタート
- 8月 味噌に関する基礎知識をオンライン学習の実施
「**ととのみそ**」試作会（津久見市）の開催
- (1) 味噌製造の講義
 - (2) 味噌製造試作
大豆味噌、マダイ味噌、ケンサキイカ味噌の仕込み
 - (3) 津久見市の現状と課題
- 9月 「ととのみそ」仕込み復習（別府大学短期大学部）
- 9月～12月 味噌の熟成過程観察、成分分析と機能性評価
- 12月 「ととのみそ」試食会および事業反省会（津久見市）
学生による事業検討会（別府大学短期大学部）の開催
- (1) 創作味噌の試作
コーヒー味噌など8種の**新しい味噌の仕込み**を実施
 - (2) 事業の反省と展望



味噌づくり講義

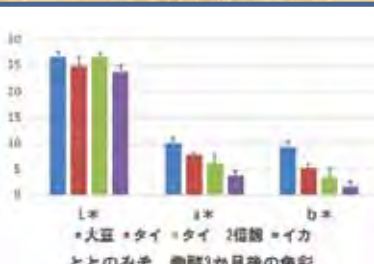
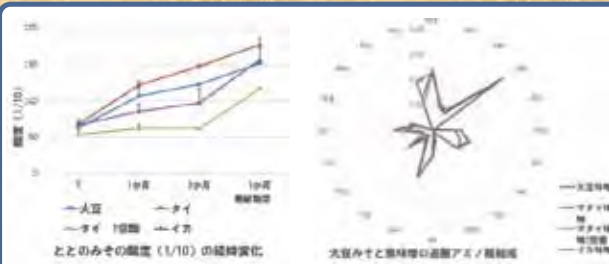
発酵中の成分分析



味噌づくり仕込みの様子

官能検査

「ととのみそ」の性状



大豆味噌および魚味噌の一般成分、遊離アミノ酸、酸度、pH、色彩を分析した。
今回の味噌は3か月で発酵終了、特に遊離アミノ酸について、大豆味噌と比較して魚味噌（ととのみそ）はバランスは遜色ないが、総量は大豆味噌の1.6～2.9倍含まれていた。また、新規機能性の可能性を見出した。

評価と今後の展望

- ① 学生は味噌への知識、味噌をつくる技術、発酵の過程で味噌が熟成して変化の様子、そして**モノづくりの可能性のすばらしさを知る**ことができた。
- ② できた**味噌はおいしく**、今後、**商品開発まで視野**にいれて継続して活動する。→ 地域貢献できた。
- ③ 商品の付加価値向上となる**機能性**について、検討していく。
- ④ **創作味噌**による新たな商品開発を目指す。



マスコミ テレビ OBS ラジオ FM大分 2回
新聞 大分合同新聞 3回 今日新聞 以上紹介された。

ととのみそプロジェクト メンバー

MISOBA（江藤薫）
津久見市観光協会
工房こひる（今村祐美）
別府大学短期大学部
食物栄養科1年
伊藤日菜海 甲斐明日香
川野未羽 木下果林
姫野拓真 福谷美羽
和田ひかる
教授 岡本昭 准教授 衛藤大青 准教授 藤岡竜太



「豊の七瀬柿」PR大作戦

別府溝部学園短期大学 / 食物栄養学科 准教授 土谷 知子

豊の七瀬柿PR大作戦

別府溝部学園短期大学 食物栄養学科 准教授 土谷知子 / 助教 河野拓郎
 学生：和田菜摘、渡辺真実、本庄歩、森悠陽、川崎舞、横山利香 他 8名

背景と目的：大分市野津原地区で栽培されている豊の七瀬柿は利根早生という品種の脱渋柿である。本学食物栄養学科とJAおおいたおよび柿部会は連携協定を結び、協働で七瀬柿の魅力を知り発信していくことで、高齢化に悩む農家の応援と発展の一助となることを目指している。本事業はその3年目の取り組みとなる。

生産者の想い・「柿」の魅力を知る

生産者へインタビュー

(2020.7.1)

柿畑を見学し、柿農家ははじめたきっかけ、やりがいや苦労することなど取材。高齢化により部会員が減っていることなどを知る。



収穫体験(2020.9.28)

2年生8名
1年生7名 計15名



JAおおいたの協力のもと、3つの圃場に分かれて収穫作業を行った。柿は痛みに弱い為、一つ一つ丁寧に扱う必要があり、それが七瀬柿の高い品質につながっていることを実感できた。



柿渋つくり (染色体験)

奈良式高速抽出技術 (簡易版)

摘果柿を使用



摘果柿を利用し、柿渋を抽出した。布を染色し、素材や媒染による色の変化を体験した。学生からはワークショップなどで柿に親しみきっかけにできるのではという声がかかった。

加工品の開発と販売活動

昨年から青果ではなく、冷凍や乾燥といった1次加工品を原料とした加工品を開発、販売することで普及に繋げる活動を行っている。今年度はドライ柿を練りこんだ「七瀬柿ブレッド」を開発、過去に開発した製品と共に販売した。



8月4日学内販売(七瀬柿ブレッド、柿丸ごとかき氷)
10月9日農林水産祭中止→学内販売
11月7日大分市主催おおいたのマルシェ (大分いこいの道広場)



大分合同新聞8月14日付

販売店調査

市場出荷後は生産者もJAも把握できていなかったため、七瀬柿をどこで購入できるか大分市37店舗、別府市12店舗、日出町8店舗を調査した。その結果、大分市では34店舗、別府市では5店舗確認できた。日出町では確認できなかった。
 また「七瀬柿」を販売しているところでも「七瀬柿」の表示がされていないことが多く、ブランド名が浸透しない原因のひとつだと思われる。



食育活動

(2020.11.26)

大分市日岡校区児童育成クラブにてペープサートを使用した食育活動を行った。

「子どもから家庭・地域へ」



店頭で試験販売



「七瀬柿のドライフルーツ」を店頭で試験販売することができた。JAおおいたの直売所である大分市の花野果9店舗と湯布院の陽だまりで11月26日より販売した。約200袋が2週間ほどで完売し、売れ行きは良かったと言える。

ドライ柿の商品化と試験販売 (JA)

<p>実行案</p> <ul style="list-style-type: none"> 売れ行きは〇 (販売数が多かった(陽だまり)ポップで売れ行き〇) 	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 量・価格設定は〇 (パッケージは改良すべき) 大袋などの規格があっても販売をよくなる可能性がある
<p>解決すべき課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 類似商品が出やすい(どう差別化を図るか) 季節を通して販売するための原材料確保と品質保持 製造施設 販売費や販売費などターゲットを絞った販売 	

JAとして商品化に手応えは感じた

PR媒体作成

学生によるPR動画を作成 (HPにて公開予定)



七瀬柿を分かりやすく解説したリーフレットを作成中。



生産者の声

Q. 連携協定を結んでから3年経ちますが、何か影響や変化はありますか? (回答数6)

- A. 生産量は変わっていない(4)
- A. 市場価格は高くなった(4)
- A. 生産意欲は増えた(3)
- A. 収入は増えた(3)変わらない(2)
- A. 知名度は上がったと感じる(5)



- 学生と触れ合うのは楽しい(5)
- もっと手伝いに来てほしい(2)
- 6次産業開発に期待。



考察

生産者の声を見るとおり、生産量の変化はないにもかかわらず、市場価格や収入は上昇傾向にある。また知名度の実感を感じている人が多く、我々の活動が貢献できている部分もあると思われる。また学生との触れ合いを楽しんでいると感じる生産者が多いことがわかった。

一方で生産者の高齢化・部会員の減少は深刻で、新規就農者の確保などいち早い課題解決が望まれる。対策には行政との連携が欠かせないと思われる。

販売店調査から七瀬柿の表示無く販売している場合が多いため、宣伝資材を活用することを提案した。

PR媒体として、リーフレット、動画を作成した。動画づくりは、スマートフォンを利用することで比較的容易にできるものの、効果的な撮影技術やノウハウが無いと質の高いものは難しいため専門学科との連携が望ましい。





おおいたのもったいないを考える。

～SDGs持続可能な社会の実現に向けて私たちができること～

別府溝部学園短期大学 食物栄養学科 教授 牧 昌生

助手 佐伯由布 学生 児玉真由美 太田由紀子 御手洗美紀 小出優子 園田愛実 他

疑問？

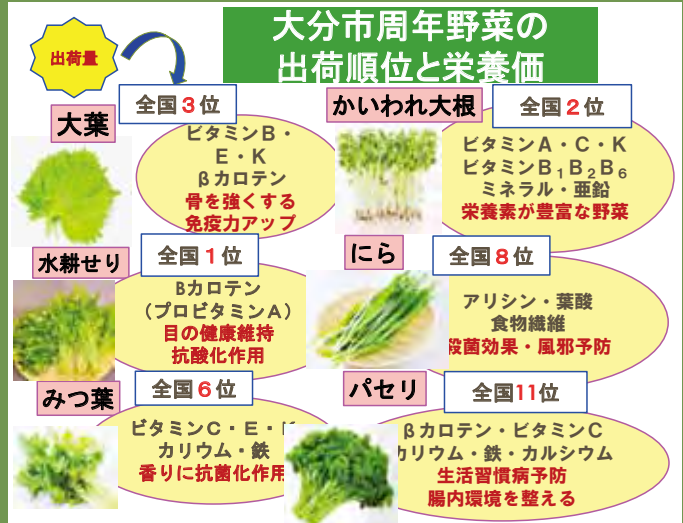
スーパーで余っている野菜や果物は捨てられているのか？

仮説

捨てられている→それらの野菜、果物を使って何かを作る→消費量が伸びる→農家の収入が増える
→食べる人の栄養も取れる

方法

- 1.地域小売業調査
 - 2.大分市公設地方卸売市場訪問
 - 3.JAおおいた訪問
 - 4.大葉生産農家(甲斐KAI農園)聞き取り調査
 - 5.レシピの検討と開発
 - 6.アンケート調査
 - 7.食育活動
 - 8.食育ポスター、レシピ集作り
- 方向性確認
廃棄される大葉有



活動の様子

- 1.地域小売業調査
(大分市、別府市内スーパー)
令和2年6月上旬
仕入から販売、廃棄までの経路を知る。
→廃棄される野菜はほとんどない。
- 2.大分市公設地方卸売市場訪問
令和2年6月25日(木)
卸売市場の業務内容を知る。
処分する野菜や果物はあるのか？



廃棄される野菜はほとんどない

- 3.JAおおいた訪問
令和2年7月9日(木)大分市周年野菜を知る。
廃棄野菜は出ないが、生産途中での
廃棄部分あり
・・・大葉の高さ調整



- 4.大葉生産農家(甲斐KAI農園)聞き取り調査
苗を植えてから夏場は3～4週間、冬場は6～7週間ごとに「葉落とし」作業を行っている。
大葉のもったいないで再利用を考える

○学内販売
別府溝部学園短期大学購買部にて
令和2年10月25日(金)
「大葉とチーズのカップケーキ」の
試食販売、嗜好調査の実施

- 5.レシピの検討と開発



カップケーキ
1個に大葉
約6枚使用



○ひめやま幼稚園食育活動
令和2年11月26日(水)
「大葉とさつまいものケーキ」の試食、嗜好調査の実施



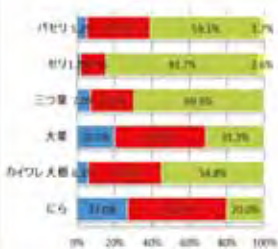
大葉の食育

試食会

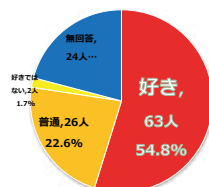
アンケート調査

アンケート調査・結果

10歳未満～70代の男女176人に実施
1)周年野菜をよく食べますか？



2)大葉のカップケーキの味は？



◆大葉を使用したスイーツは、**大いに好まれる味である。**
◆にら、大葉以外の周年野菜は積極的な利用、摂取をされていない。

まとめと今後の課題

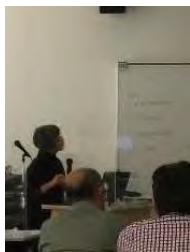
- 「おおいたのもったいない」を有効活用できた
- 生産者が意識していなかった
廃棄部分の再利用ができ、
継続的利用の経路を見出すことができた
- 食育活動により周年野菜の認知度を高めた
他の野菜について継続
- この活動が「SDGs持続可能な社会」に繋がる



大友宗麟ゆかりの西洋文化とその後の行方

長崎・生月島の祈り“おらしよ・歌おらしよ”から豊後キリシタンの実態を探る～

特別講師：竹井成美 先生・木内秀幸 先生・後藤篤美 先生 別府溝部学園短期大学：松尾佳保・土谷知子



450年前の豊後府内の様子
G.ヴィレラの書簡(1557年)
J.フェルナンデスの書簡(1561年)
から竹井先生に紐解いて頂いた。

令和2年10月11日(日)「豊後キリシタンが習い覚えた“おらしよ・歌おらしよ”の順番と内容～生月島の隠れキリシタンが口承伝承する“おらしよ”との共通点から」

令和2年12月13日(日)「生月島の隠れキリシタンの行事から推察する豊後キリシタンの実態」

大分(豊後府内)は、南蛮文化開花を導く苗床のような存在であったと宮崎大学名誉教授 竹井成美先生は仰っている。それはどのように広まったのだろうか。

キリシタンの信仰は「おらしよ」を覚えることから始まった。

1557年のJ.フェルナンデスの書簡で、豊後キリシタンたちに「おらしよ」を教えたと書かれている。それは以下の順番であると記載しており、生月島で口承伝承されていた「おらしよ」と順番が全く同じである。

竹井先生は長年、生月島のかくれキリシタンの行事や口承伝承による「おらしよ・歌おらしよ」をご研究されている。その実際の様子と、1600年に長崎の町年寄 後藤登明がグーテンベルグの印刷機で金属活字で出版した「どちりなきりしたん」と「おらしよの翻訳」から、当時、豊後府内のキリシタンたちが「おらしよ」から学んでいた内容などを教えて頂いた。

「おらしよ」とは?

我が念(想い)を天に通じ、御ある神に申し上げる望みをかなえたまう道、橋である。

「どちりなきりしたん」から

●パアテル・ノステル

●アベ・マリヤ

●クレド

●サルベ・レジナ

○十のマダメント

○サンタエケレジャのマダメント

○根本七悪

○サンタエケレジャのサカラメント

○慈悲の所作

●赤字

これらはラテン語で覚えるように言われていた。神儒仏三教との混合を避けるため、言語主義であった。実際に、生月島の隠れキリシタンの方々もラテン語で唱えている。

○黒字

これらは日本語で覚えなさい。



大分歴史研究会

大分の歴史の面白さを初めて知りました!!



金子 葵 今村 花永
上園 愛永
猪原寿々子 大島 海優
小野 海星 加来 雅也
後藤 夏紀 佐竹 真白
佐藤 勝成 砂野 遼

令和2年11月8日(日) 竹田市キリシタン遺跡探訪

竹田とその周辺では大友宗麟の時代に在地領主(国衆)朽網氏(宗暦・宗策父子)により豊後でも最も早くキリスト教の布教がなされ教会が建設されました。その後竹田城下で岡城主・志賀親次が布教を勧めます。大友氏改易後、竹田に入封した中川氏もキリスト教を庇護したために「隠れキリシタン」ならぬ「隠しキリシタン」というべき状況が起こります。竹田とその周辺はキリシタン遺物が数多く現存する稀な地となりました。

そんな竹田のキリシタン遺跡を木内先生にご案内していただき、また、竹田キリシタン研究所で永年研究・発信をされている後藤所長のご協力の下、ご説明いただきました。

スケジュール

- ①朽網(長湯) 原キリシタン墓(INRI)
- ②竹田 宣教師洞窟 大庄屋
- ③竹田 鏡処刑場跡
- ④竹田キリシタン研究所
- ⑤竹田 殿町キリシタン洞窟礼拝堂
- ⑥朝地町 千十字架(磨崖クルス)



①朽網(長湯) 原キリシタン墓(INRI)

INRIの文字が刻まれた石製十字架は、日本国内において、ここにしかないと言われる極めて貴重なキリシタン遺物だそうです。



②竹田市 大庄屋 宣教師洞窟

礼拝堂、宣教師の寝泊り、トイレと3つの洞窟が並んでおり、九重連山から採掘できる硫黄成分と糞尿を化学反応させ、火薬に必要な硝石を作っていたのではないかと言われています。



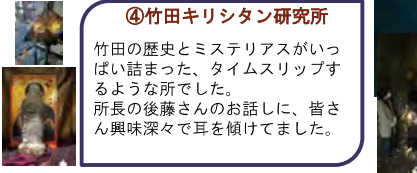
③竹田市 鏡処刑場

竹田で殉教したキリシタンは鏡の処刑場跡で処刑されたそうです。県道沿いにあるこの遺跡の存在を知らなければ、通り過ぎてしまいます。



⑤竹田市 殿町キリシタン洞窟礼拝堂

有名な場所ですが、なんと、中に入れて頂きました。身近で祭壇を見ながら説明して頂き、授業で歌った「miserere mei deus」を礼拝堂の中で実際に歌い、学習と歴史を関連付けることができました。とても神秘的で、その空間を感じ歌えることは、とても貴重な体験になりました。



④竹田キリシタン研究所

竹田の歴史とミステリアスがいっぱい詰まった、タイムスリップするような所でした。所長の後藤さんのお話しに、皆さん興味深々で耳を傾けてました。



⑥朝地町 千十字架(磨崖クルス)

人里の中、畑の中にひっそりと、大きな樫の気に見守られたたずむ姿は、当時の人たちの祈りを真直ぐ伝えてくれるようです。木内先生に教え頂いてはじめてその存在を知りような遺跡です。

大分の輪を広げよう～給食施設で地産地消を取り入れるためのレシピ開発～

別府清部学園短期大学／食物栄養学科 教授 望月 美左子

大分の輪を繋げよう

～給食施設で地産地消を取り入れるためのレシピ開発～

別府清部学園短期大学 食物栄養学科 2年 深町朱里 松尾真貴子 後藤紗希 佐藤そら 教授 望月美左子

●目的：地域の食文化や地域の食の魅力を給食施設での活用を目的に調理特性の検証と普及活動を進める。また、若者の野菜不足、子どもの野菜嫌いが問題となっている中、「大分県の野菜」に焦点を当て、より食べてもらえるようなレシピを考案し、普及活動を行うことを目的とした。
●連携企業・自治体：大分県農林水産部地域農業振興課、大分県生活環境部商品・生活衛生課、大分県庁教育委員会体育保健課学校保健食育班 大分市農林水産部農政課・認定こども園ひめやま幼稚園 他 給食施設の地産地消利用状況調査協力施設

①大分県食材調査

大分県の主な特産物

(大分県「The・おおい」ブランド)

(JAおおい)

乾椎茸 小ねぎ ピーマン トマト ニラ 白ねぎ かんしょ
ハウスみかん かぼす 梨 ぶどう いちご (ベリーズ)
養殖ブリ おおいた和牛

小ねぎ トマト ニラ ピーマン 白ねぎ 甘太君
かぼす いちご 梨 ぶどう ハウスみかん
豊後牛



②地産地消のレシピ開発

地産地消コンテストの応募

梨のチーズケーキ

【材料】(4人分)
 エアークリーム 45g
 無塩バター 20g
 卵黄 1個
 ●梨 60g
 クリームチーズ 70g
 塩 3.5g
 レモン汁 7.5g
 塩 3.5g
 ●梨(飾り用) 15g

【作り方】
 ①梨を1cmの角にカットし、砂糖と蜂蜜を加えて煮る。
 ②クリームチーズとバターを混ぜ、卵黄を加えて混ぜる。
 ③クリームチーズとバターを混ぜ、卵黄を加えて混ぜる。
 ④②と③を混ぜ、①を加えて混ぜる。
 ⑤オーブンで焼く。

里芋ロquette-ニラソースかけ

【材料】(4人分)
 里芋 100g
 ニラ 100g
 醤油 大さじ1
 塩 少々

【作り方】
 ①里芋を茹で、潰す。
 ②ニラを茹で、刻む。
 ③醤油と塩を加えて混ぜる。

包み揚げ焼き

【材料】(4人分)
 鶏肉 100g
 野菜 100g
 醤油 大さじ1
 塩 少々

【作り方】
 ①鶏肉と野菜を包み、揚げる。
 ②醤油と塩を加えて食べる。

大分野菜キッシュ

【材料】(4人分)
 エアークリーム 45g
 無塩バター 20g
 卵黄 1個
 ●大分野菜 100g
 クリームチーズ 70g
 塩 3.5g
 レモン汁 7.5g
 塩 3.5g

【作り方】
 ①大分野菜を茹で、刻む。
 ②クリームチーズとバターを混ぜ、卵黄を加えて混ぜる。
 ③大分野菜を加えて混ぜる。
 ④オーブンで焼く。

③給食施設の地産地消利用状況調査

【目的】給食施設の地産地消利用状況について

【方法】質問紙法(止め置き法)、郵送
2020年8月質問紙郵送、9月回答返送

【質問紙項目】
 1.施設種類・・・病院 高齢者施設 小中学校 幼児園
 2.施設調理形態・・・中央調理場 単独施設 その他
 3.施設給食経営形態・・・直営 委託 その他
 4.施設所在地・・・大分県内の市町村
 5.一回の提供食数
 6.個人および集団に対する栄養指導の回数/方法
 7.利用率が高い大分県産農水産物の産物について
 8.大分県産農水産物の受け入れ形態
 ・新鮮食品、冷凍食品、調理加工品、その他
 9.大分県産農水産物の利用について掲示有無
 ・掲示している、掲示していない
 10.大分県産農水産物の利用に關しての考えや意見(記述式)

【結果】
 質問紙の回収率
 病院 43%
 高齢者施設 57%
 幼児園 81%
 給食センター 100%

直営・委託の割合

施設	直営	委託
病院	23%	77%
高齢者施設	50%	50%
幼児園	100%	0%
給食センター	50%	50%

大分県産農水産物の利用状況
 給食センター：ピーマン、トマト、ニラ、かんしょ、乾しいたけ、かぼす、梨、ぶどう

意見項目
 病院：馴染みのある味にするために、地元産の醤油や米を使用している。価格重視のため、産地を特定していない。
 高齢者施設：大分県産のものを使用したいがコスト面や手間の問題で冷凍を使用することが多い。
 幼児園：大分県産のものを使用したいが値段や量の確保の問題で取り入れにくい。調理に取り組みやすい食材が多く、使用しやすくていい。
 給食センター：積極的な活用を希望するが、人数や前品時の衛生管理、予算等の関係で難しい。大分県産農水産物の受け入れ実績では1週間を使用した割合は平均20%と少ないが単独であればもう少し活用できる。

考察
 食材のコスト面を考えると、現実的には難しいと考えている人が多い。地産地消への意識の差が大きい。人員不足のため、冷凍食品など下処理済みの食材を使用しており、地産地消を行っているかどうか分からない施設があった。

④大量調理への検討

大分野菜つつめキッシュ 嗜好調査

【結果】
 バネラー 25名
 方法 試食 質問紙直筆
 実施日時 2020年10月19日(月)
 実施場所 2号館1階
 使用野菜 さつまいも、にんじん、玉ねぎ、乾しいたけ、ニラ、トマト、ピーマン

スチームコンベクションオーブン使用調理

【質問紙について】
 好き 21 普通 4 嫌い 0

好きな野菜
 さつまいも 18 玉ねぎ 17 ピーマン 14 ニラ 14
 ミトマ 14 乾椎茸 11 人参 8

嫌いな野菜
 ピーマン 3 ミトマ 2 ニラ 2 乾椎茸 2 人参 1
 さつまいも 0 玉ねぎ 0 無し 16

【考察】
 キッシュについて
 好きと答えた人が21人
 普通と答えた人が4人
 嫌いと答えた人はいなかった。
 バネラーには、嫌いな野菜として、ピーマン、ミニトマト、ニラ、椎茸、が挙げられているが、このキッシュが嫌いという人はいなかった。

全体の考察
 ①給食施設で地産地消を取り入れるためには、コストに見合う味、作業効率を上げることが必要であることを確認することができた。
 ②価格重視のため、冷凍食品や下処理済みの食材、レトルト食品、缶詰等の食材は産地を特定していないことがわかった。また、主食の米、並びにみそ・しょうゆは、馴染みの味を大切に、こだわって大分県産のものを使用する施設があることが分かった。
 ③新鮮食品の中でも大分県産を使用しているのに、掲示やPRを生かさない施設が多いのでPRの仕方を検討する必要がある。
 ④大分野菜つつめキッシュは、大分県産野菜をたっぷり使っていて、椎茸嫌いでもピーマン嫌いでも喜んで食べる事が出来る料理であることがわかり、加える食材を変え、レシピの応用ができると思った。天板に流し入れ、スチームコンベクションオーブンで一度に焼き上げることができ、大量調理にも向いていると思った。
 ⑤大量調理には、温度時間の検討が必要である。今後栄養士として給食現場で検討していきたい。
 ⑥給食施設の地産地消利用状況調査にご協力いただいた施設に左記の「幼児のためのワンプレートランチ」冊子とこの研究のまとめを送付し、大分県の地産地消の輪を繋げていただくようお願いした。また、大分県内の幼稚園・保育園・こども園にも冊子を送付した。

高校・大学・自治体連携および文理融合による交通まちづくりプロジェクト—豊後大野市三重町駅前活性化と公共交通通学促進にむけて—

大分大学（経済学部経営システム学科 交通論研究室、理工学部創成工学科建築学コース／工学研究科福祉環境工学建築学コース 建築・都市計画研究室）
 三重総合高校メディア科学科3年課題研究チーム（指導：秋月大輔教諭）・姫野由香（理工学部助教）・大井尚司（経済学部門教授）
 （協力）豊後大野市（建設課・まちづくり推進課）・株式会社オオバ・日本工営株式会社福岡支店

1 背景と目的・研究対象

背景

- コミュニティの維持が困難**
人口減少、高齢化、過疎化、中心市街地衰退
- 地方都市のスプロール化と自動車化**
商業等の中心市街地からの離脱 通過交通増加
- 公共交通の利用者減、持続可能性の危機**
高校生の通学利用減、コロナで外出抑制、人口減

研究目的

都市空間の魅力向上を図った「公共空間」づくり
 ~ どのような道路・空間が必要かの要件を探る
 今後の空間整備と交通体系のあり方を探る
 ☆ 世代によって求められるものの差異にも注目

研究対象・手法

対象： 豊後大野市三重町駅前通り（周辺部一部含む）
 手法： 共同（高大連携ワークショップへの参加、社会実験の運営と街頭アンケート）、理工担当（受託事業で実施：全国の類似事例調査、ワークショップ設計と運営、社会実験の設計と準備と運営、調査を反映した街路設計）、経済担当（高校生・事業者へのアンケート・ヒアリング、ワークショップ・駅前通りにおける空間づくりを実現する運営課題の導出）

2 プロジェクト遂行の経緯について

問題意識の共有

公共空間の利活用
 中心市街地の活性化
 公共交通の利用促進

道路整備の課題（歩道がない、通過交通対策）
 *一方通行化の是非

商業機能のスプロール化
 高校生の居場所がない（待てない、買えない、食べられない）

実は深く関係！では？

通学に公共交通利用少ない
 バスの存続危機⇔通学利用少

プロジェクトの実施

ワークショップ+社会実験への参加
 公共空間活用(プレイスメイキング)のトライアル

高大連携ワークショップへの参加
 7回（実験後含む）+現地踏査・ヒアリング調査
 若年層ニーズの把握+課題抽出+社会実験準備と反省
 中心市街地（駅前通り）担い手ヒアリング：ニーズ把握

社会実験の運営と街頭アンケート（三重町ホコ天と併催）
 新しい公共空間づくり；遊び、くつろぎの場→アンケート
 道路幅員（車道・歩道配置）シミュレーション→アンケート
 *公共交通を身近に：バス体験と乗り方ガイダンス、ポスター展

（途中から市事業に切り替え）
 ①高校生(全体)へのアンケート + ②高校生とWS・事業者ヒアリング
 →対象地域を「旧大野町」に限定（バス通学利用ゼロ、路線存続危機）
 ③大野町の学生に聞き取り+保護者アンケート ④実乗調査

3 プロジェクトに関する成果： 社会実験アンケートを中心+ヒアリングなどから

社会実験：まちを変えた反応は？

- 歩道空間は「ゆったり」：子連れの多さ、滞在長
- 車社会=2車線ないと ⇔ 危ないことは認識
- ほしい空間は「座れる」場所 ←多世代が支持

予想を超える1000人超乗客

	1車線片寄せ歩道	2車線片寄せ歩道	1車線片寄せ歩道	1車線片寄せ歩道
乗客数	113	28	128	43
選択肢	寄りかかって休む	椅子に座る	座り込む	
得票数	35	141	151	

地域の声・高校生の反応は？

- ほしいのは遊び場、安く長居 = 「立ち寄り場」
- 住みやすさ+町の活気ほしい = 若者への期待
- 移動が行動に制約：ある程度の利便性は必要

4 豊後大野市への提案—三重町駅前活性化、何をすべき？

三重町駅前通りのあり方は？：プレイスメイキングと道路空間形成

- 自動車との共存： 通過交通抑制、荷捌きや乗降利便性確保、安心して歩けること
- 地域（商業・住民）との共存： 集客や滞在・ゆとりを実現する屋台や空き店舗活用
- 公共交通との共存： 「待てる場」「立ち寄り拠点」+交通の利便性（価格、時間帯）

高校生（将来の街づくり担い手）にとっての今後：何が必要？

- 「街に集える」空間の有効活用—「待てる」「集える」：地域資源・住民との連携
- 成長した後（=進学、就職、定住後）の視点： 若者のほしいもの≠未来に要るもの

小学生のためのプログラミング教室 in 日出町

大分大学／教育学部 教授 市原 靖士

「おおいた創生」推進協議会 令和二年度実践型地域活動事業

小学生のためのプログラミング教室in 日出町

大分大学 教育学部 市原靖士

活動場所・日時・テーマ

大分県速見郡日出町藤原2277-1 日出町児童館
第1回令和2年10月3日 プログラミング基本操作
第2回11月14日 簡単なプログラミングにチャレンジ
第3回12月5日 課題にチャレンジ基礎編
第4回令和3年1月16日 課題にチャレンジ応用編
第4回2月13日 LEDをコントロールしよう
第6回3月6日 ドローンを自動操縦してみよう



<活動内容>

プログラミング教室の実施は、令和2年10月3日、11月14日、12月5日、令和3年1月16日に日出町児童館にて行った。（令和3年2月、3月にもそれぞれ1回ずつ実施予定）対象小学生は3年生から6年生の16名。ほぼ全員がプログラミングに関しては初めて学ぶ状況にあり初歩的なことから応用的な内容まで計6回を実施した。コアメンバーである大学院生と学部4年生と6回のカリキュラムを検討しステップ・バイ・ステップで学べる内容になるようカリキュラム構成を検討し、その後具体的な1回毎の授業の流れの検討を行った。また、小学校での授業ではないためプログラミングが楽しい、興味を持ってもらう、好きになってもらうことをコンセプトにしてゲーム的な内容も取り入れたものとした。この検討を行うことは学生にとっても多様な視点からの考えて授業を構成することの大きな経験となったと考える。また、自分の構成した流れを実践の中で確認することにより様々なフィードバックがあったと考える。特に、今回は参加者が小学校3年生から6年生までの16名と学年横断な構成となっていることにより、普通の小学校での授業とは違う構成についても配慮し、また、その利点を活かしながら計画、実践することとなった。これらの経験は、コアメンバーにとって多方面において活かすことできる経験になったのではないかと考える。



<今後の課題>

今回の活動では、学生が中心となってカリキュラムや学習内容、1回毎の教室の時間の流れや配分等を考え、学生が主体となって教室を運営することが可能となった。しかしながら、ハードウェア（パソコンやタブレットPCなど）やその周辺機器、プログラミングができる教材など準備には資金が必要であり、この点についての解決策を今後の課題としたい。

学生による課題解決行と地域への成果等

今回のプログラミング教室の計6回の構成はマニュアル化をはかることにより、教育学部の学生であればおむね誰でも授業者、計画者となりプログラミング教室を開催できる状況になったのではないかと考える。また、参加してくれた対象者の小学生たちは、ほぼ全員がプログラミング教室に満足しており、毎回、時間を延長して「もっと、やってみたい」「次回がたのしみ」「新しいものもしてみたい」「家でもできることも教えてほしい」など前向きで高評価な感想が多く聞かれた。日出町児童館の責任者の方からも来年度も可能であれば是非お願いしたいとの要望も受けている。





きたく部 2020新展開

放課後学習支援活動

× 居場所づくり活動

きたく部とは？

きたく部は「放課後、来たくなる場所、きたく部」をコンセプトに未就学児～高校生までを対象とした“放課後学習支援活動×居場所作り活動”を実施しています。平成30年10月に活動を開始しました。大分市穂田公民館で毎週月曜・木曜の週2回の活動を実施しています。大分大学教育学部・経済学部・理工学部・教職大学院の学生が参加するボランティアサークル「よしみちの会」がアイデアを出しながら企画・運営しています。そして、令和2年8月からは大分県立大分雄城台高等学校の高校生ボランティアの参加もスタートしました（新展開1）。活動内容は右の2つです。

「きたく部」

大分市穂田公民館にて毎週月曜・木曜日16:00～18:30の時間帯で実施します。ここでは、「やらなきや」（宿題・予習・復習）「やりたい」（自由な学び）「やろうよ」（交流）の“3つの学び”に挑戦します。

「きたく部〇〇の日」

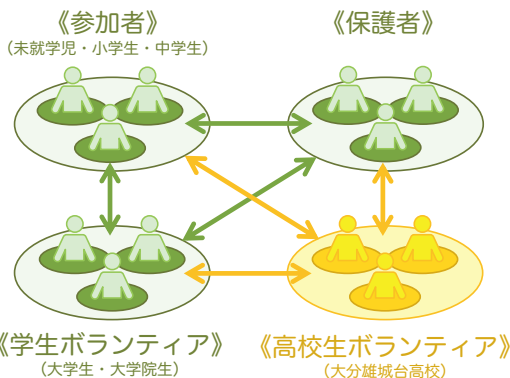
2ヶ月に1回程度、不定期に開催するスポーツや文化活動のイベントです。「〇〇」には、子どもたちがやってみたいこと、みんなで楽しみたいことがなんでも入ります。子どもたちの声をもとに企画します。

新展開！その1

〈高校生ボランティアの参加〉

新展開1 大分雄城台高校生のボランティア参加！

令和2年8月から大分雄城台高等学校との連携により、高校生ボランティアの参加がスタートしました。1年から3年まで26名の生徒がボランティアとして参加し、12月までの延べ人数は99名となりました。なかには、期間中に10回活動に参加した生徒もいます。きたく部は、大学生と高校生と一緒に活動することで、「多層的なつながり」の実現を目指していきます（図を参照）



参加アンケート（12月に大分雄城台高校を通じて実施）の結果からも、「活動の満足度」の肯定的回答約97%、「子どもへの貢献」の肯定的回答約77%、今後の参加希望100%と、高校生が満足感とやりがいを感じた活動となったことが伺えます。こうした取り組みを令和3年度以降も継続・発展させていきます。

新展開！その2

〈小学生～高校生に参加者が拡大〉

新展開2-1 感染症拡大防止の対策を整え、活動再開！

きたく部は、令和2年3月～6月までの活動休止期間を経て、6月25日より活動を再開しました。マスク着用や体調チェック、検温などの対策を取りながら活動を行い、令和2年12月末までに44回開催、延べ411名が活動に参加しました（令和元年度：60回、739名）。

新展開2-2 学校・学年を超えた交流の拡大！

令和2年度は、小学校4校、中学校4校、高等学校1校、特別支援学校1校の児童生徒が活動に参加しました（下の図を参照）。中学校を卒業し、進学後も継続して活動に参加してくれる高校生もいます。活動開始2周年を迎え、きたく部が放課後の居場所として定着しつつあります。

2018	穂田小学校	穂田中学校	福德学院高校
2019	宗方小学校	穂田西中学校	
2020	豊府小学校	穂田南中学校	新生支援学校
	南大分小学校	南大分中学校	（高等部）

新展開2-3 子どもたちの「やりたい」にもっと応える！

きたく部は、参加者の興味・関心、好奇心の芽を育てることを大切にしています。令和2年度は、プログラミング教材「Sphero BOLT」の導入や、「日販よい本いっぱい文庫」による本の寄贈を活用したクリスマスプレゼントの実施など子どもたちが自分の好きなことに自由に取り組む環境づくりを進めました。令和3年1月以降も、編み物（かぎ針編み・指編み）に取り組むなど、子どもたちの「やりたい」にどしどし応えていきます！



県産木材を利用したものづくりワークショップの実践

プロジェクトメンバー

大分大学教育学部 准教授 中原久志
 大分大学大学院教育学研究科 院生 手塚浩介, 大津春輝, 古本拓巳
 大分大学教育学部 学部生 菅遥加, 渡辺秀征, 山本健太, その他5名



プロジェクトの目的と概要

本事業では、大分大学教育学部木材加工実習室を拠点として、学生に対して地域木材の「知識理解-体験的活動-環境保全志向の育成」のサイクルを位置づけたアクティビティデザインを試行的に実施した。具体的には、「幼児を対象とした遊具の製作」、「幼稚園・保育園職員を対象としたワークショップ」等において地域課題解決に向けた木育活動を設定し、地域課題の認識及びその理解を図る活動を展開した。具体的には、

- (1) 幼稚園教諭・保育士へのヒアリング、木材を用いた教材・遊具等の提案・試作
- (2) 幼稚園教諭・保育士を対象とした学生主体のワークショップの企画、準備
- (3) 地域活性に向けた取り組み（遊具製作ワークショップ、不定形積み木の製作・寄贈）の実践
- (4) 大分県の幼稚園教諭からの遊具の評価

を実施するものとする。事業の運営にあたっては、本事業申請者が各団体と連携・協力し、学生を主体者とした活動を実践する。

活動の実施状況

- 幼稚園教諭・保育士にヒアリング、遊具の提案・試作（2020年7月～9月）
 県産材のスギ・ヒノキを用いたスロープ型おもちゃ、不定形積み木など5種類
- 不定形積み木製作ワークショップ（2020年10月29日、30日）
 県産材のヒノキを用いた不定形積み木づくり（図1、2）
 対象者：旦の原保育園教職員28名、当日参加学生3名
- 中津市如水こども園に寄贈する不定形積み木の製作（納品2020年11月）
 県産材のヒノキを用いた不定形積み木200個（図3、4）
 使用対象者：幼児、製作者：大学生5名、大学院生3名



図1 ワークショップでの説明



図2 製作した積み木を積む様子



図3 積み木を配布する様子



図4 幼児が積み木で遊ぶ様子



図5 不定形積み木製作の流れ

事業の地域への成果

本事業を通して、参加学生だけでなく、ワークショップに参加した幼稚園教諭・保育者、その他の講習会の参加者も大分県の木材の魅力を理解することができていた。また、今回製作した不定形積み木は教職員からの評価も高いものであった。本事業に参加した将来教員を目指している学生も、実践的指導力の育成や地域を題材とした学習の効果を知る機会を得ることができた。

大学等による「おおいた創生」推進協議会
令和2年度地域活性化事業（実践型地域活動事業）

のつはる天空広場活用プロジェクト

大分大学 理工学部 共創理工学科
指導教員：井上 高教・岩本 光生・安部 恵祐（IRセンター）
発表学生：4年生/1名、3年生/3名、2年生/3名、1年生/3名
連携自治体：大分市企画課、大分市野津原支所
活動地域：大分市野津原地区

プロジェクト概要

課題：大分市が、大分川ダムの開発に伴って、地域振興の一環として整備した「のつはる天空広場」の活用策の検討を行う。市街地のイベントスペースとの違い、過疎地で大分駅から距離が遠く、気軽に使えない、普段使いができないなど不利な条件がある一方、自然に囲まれているなど野津原ならではの好条件もある。これらの条件を踏まえて、「道の駅のつはる」の利用客増加や、野津原地区の観光客数増加、交流人口の増加、地域消費額の増加、加えて野津原地域の住民にとっても誇れる施設となるような活用策をつくる

スケジュール：

- 10/14（水） 課題オリエンテーション、チームビルディング
- 10/17（土） フィールドワーク
- 10/28（水） グループワーク（企業担当者様からのアドバイス）
- 11/04（水） グループワーク
- 11/11（水） 中間発表 企画修正
- 11/18（水） フィールドワーク（2回目）
- 11/25（水） グループワーク（企業担当者様からのアドバイス）
- 12/02（水） 発表用資料作成・発表練習
- 12/09（水） 発表用資料作成・発表練習
- 12/16（水） 最終発表
- 12/23（水） 振り返り



課題解決方法：大分市野津原支所の担当者によるオリエンテーションおよび現地フィールドワークを基に、文部科学省が提唱するイノベーション対話ツール・エスノグラフィ・アイデアスケッチ等をベースとしながら、課題発見から解決策の企画立案まで、グループワークを中心に実施。又、外部一般企業の授業支援者（ステーキホルダー）様にも、アドバイスをいただきながら企画の精度を高める。加えて、最終発表前に自治体を含む地域の関係者に対しても中間発表を実施することにより、関係者の意見を取り込むことも合わせて実施した

期待する地域の成果等：のつはる天空広場が「道の駅のつはる」に続いて2020年度から供用開始となる。この広場を有効活用することによって、「道の駅のつはる」の利用客増加や、野津原地区の観光客数増加、交流人口の増加、地域消費額の増加等につながるものとする。

取り組みの様子

①現地地下見

②第一回ステーキホルダー様の評価

③中間発表予行演習

④自治体様への中間発表

⑤自治体様のご指摘を踏まえた第二回現地確認

⑥第二回ステーキホルダー様の評価

⑦最終プレゼン準備

⑧最終プレゼン

まとめ

本プロジェクトでの学生からの提案は、自治体様及び地域住民様の「のつはる天空広場有効活用」の参考となったと思料します。又、学生も本プロジェクトを通じて成長し、今後の人生にきっと役立つと思います。

3班の提案詳細は以下の通り

1. **Project X班**
 <アトラクション>
 ・ワイヤーアトラクション
 ・ウォーターアトラクション
 （ウエイクボード、カヤック、スワンボード、フライボート）
 ・グランピングキャンプ
2. **ウイルス除去班**
 ・地元アーティスト作品「シアン」を用いたキャンプ用テントやキャンプ場を提供してインスタグラオブジェを活用した差別化したム等SNSで広報効果を実現する。
3. **さっC班**
 ・フォトラリー作品をInstagramに投稿してもらいウォールアートやダム壁面に使用する。
 ・映画で注目された横からでも見える花火大会の実施（天空の広場に駐車した車の中から鑑賞する）



「道の駅ゆふいん」の改修に伴う地域活性化機能強化プロジェクト

1. 概要

重点「道の駅」として「道の駅ゆふいん」が平成30年に選定され改修されることになった。重点「道の駅」は、地域活性化の拠点として優れた企画があり、今後の重点支援で効果的な取組が期待される道の駅が選定される。このため由布市の方でも、計画立案を進めているが、少子高齢化が進んでいる状況の中、若者である学生から見たときに、この「道の駅ゆふいん」をどのように活用できるかという視点が欲しいとの要望があり、本事業で学生がフィールドワークの上「道の駅ゆふいん」のさらなる高機能化と、由布市を訪れる観光客数の増加や、交流人口や定着人口の増加、地域消費額の増加等につなげていくための提案を行った。

2. 指導教員・学生

理工学部 教授 岩本光生、教授 井上高教
IRセンター助教 安部恵祐
理工学部2年生2人、3年生3人、4年生1人
経済学部2年生4人、3年生2人
授業支援学生（SA）理工学部4年生1人



3. プロジェクト支援者（ステークホルダー）

【課題提供者】由布市
【フィールドワーク協力】道の駅ゆふいん、由布院温泉観光協会、
湯布院温泉旅館組合、由布市
【学生評価育成協力】大分銀行、地域科学研究所、デンケン

4. 実施日程・内容 毎回13:00~17:00

9/15（火）オリエンテーション・チームビルディング
9/16（水）フィールドワーク（※9:00~16:30）
9/17（木）グループワーク
9/18（金）中間発表（企画修正）
9/23（水）※予備日（フィールドワーク2回目）
9/24（木）グループワーク
9/25（金）発表用資料作成 発表練習
9/28（火）※予備日（資料作成・発表練習）
9/29（水）最終発表 振返り

5. 取り組みの様子

1日目【オリエンテーション】			5日目【フィールドワーク2回目 由布市内】		
				「nolc」に試乗	
アイスブレイク	由布市様より課題背景説明	質疑応答	由布市様から「nolc」の説明	「nolc」に試乗	道の駅にて再度聞き取り調査
2日目【フィールドワーク 由布市内】			6日目【四面会議システム等グループワーク】		
湯布院道の駅駅長様より情報収集	湯布院仮庁舎にて情報収集	旅館関係者様より情報収集	SWOT分析検討	四面会議システムで事業資格検討	金融関係者からのアドバイス
3日目【KJ法等グループワーク】			7日目【発表用資料作成 発表練習】		
KJ法にて課題・魅力の整理	2×2法でアイデア選定	学生評価者様からのフィードバック	PPT資料作成の注意点説明	企画の最終調整	昨年度優秀班の資料説明
4日目【中間発表】			8日目【最終発表】		
発表原稿打合せ	中間発表開始	課題提供者様質疑	各チーム最終発表	審査員からの質問	由布市様から講評

6. 各チームからの提案概要とステークホルダーからの評価

チーム【チョコレート芋焼酎】

『道の駅ゆふいん』を観光拠点として活用するための3つの提案
①梨湯
②由布市紹介VTR
③自然コンテスト

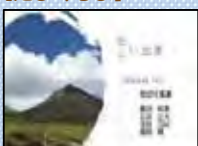


<ステークホルダーコメント>

- ・自然を再発見、あるいは「売り」とすることは大切だと思ふ
- ・見せ方が上手い。梨湯は既存の温泉で工夫すれば、実現できそう
- ・由布市全域への交流人口の増加に期待できる
- ・車利用だけでなく自転車移動も考えると良い。梨の収穫時期以外はどうか？

チーム【たびぐるま】

2大アートプロジェクト@道の駅ゆふいん
①染め物体験
②温泉灯籠デザイン体験



<ステークホルダーコメント>

- ・点を線で結ぶことで、交流人口の増大が期待できる。企画、ネーミングが面白い
- ・染め物に着目した点。由布市には、染め物に対しての認知が低いところを生かせれば面白い
- ・染め物と由布の関係性が薄い。灯籠、餅合が多い（竹田、臼杵他）

チーム【ダメガネ】

～春夏秋冬、食を愉しむ～
春:しいたけ好き好き
コンテスト
夏:ビアノルク
秋:我が家の料理自慢
コンテスト
冬:大人の恋活in道の駅ゆふいん



<ステークホルダーコメント>

- ・試食いいね！人口増の着目はOK
- ・道の駅の課題を的確に捉えている。道の駅に行けば、あれが食べられる、そういったものがないことへの着眼点良かった。
- ・しいたけのレシピ募集にはお客さんも取り込んだらどうか？ノルクを進めて風景を見ながらビールを飲むのはどうだ？

無線センサを用いた圃場モニタリング

財津 天志¹ 篠田 理沙¹ 田中 里奈¹ 原 ゆう奈¹ 野田 信¹ 船越 雅¹ 草野 夏輝² 大竹 哲史^{1*}

大分大学 ¹理工学部 / ²大学院工学研究科 *指導者

1. 何を実現したいのか?

▶ 目的

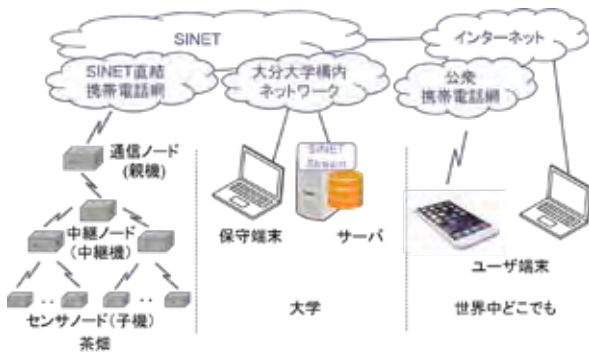
- ▶ 霜の発生予測・警告
- ▶ 収量低下要因の排除
- ▶ 茶畑ごとの品質差の原因究明
- ▶ 品質の向上・均一化

▶ 茶畑のセンシング

- ▶ 土壌・大気温湿度, 茶樹周辺温度・気圧等の監視
- ▶ 畑ごとの茶樹周辺温度・土壌温湿度差等の調査



2. 茶畑モニタリングシステム構成図



3. 構築した茶畑モニタリング環境

▶ データ収集フレームワークの導入

- ▶ SINET Streamを利用
- ▶ サーバにデータを蓄積して解析へ

▶ システムの主な構成要素

- ▶ 親機
 - ▶ センサコンピュータ (Raspberry Pi 3)
 - ▶ 無線通信機 (TWELITE)
 - ▶ 携帯通信端末 (SINET SIM)

- ▶ 中継機
 - ▶ 無線通信機 (TWELITE)
 - ▶ ソーラパネル・バッテリー

- ▶ 子機
 - ▶ 温度センサ (LM61)
 - ▶ 土壌水分センサ (KYES516)
 - ▶ 無線通信機 (TWELITE)



中継器

▶ 設置場所

- ▶ 霜被害予測
- ▶ 霜頻出箇所: ①③⑨
- ▶ 品質差の原因究明
- ▶ 品質が良好: ⑤⑥
- ▶ 品質改善が必要: ⑦⑧



茶畑内配置

4. モニタリング状況

▶ 霜被害予測

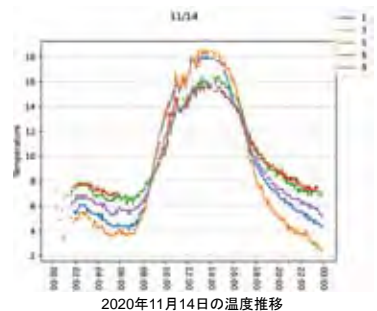
- ▶ 霜頻出①③:
日中一夜間温度差が他と比べて大きい

→ 霜発生時の状況把握

▶ 品質差の原因究明

- ▶ 品質良好⑤⑥:
最も夜間温度が高い
- ▶ 品質要改善⑧:
日中は同じだが、夜間温度が低い

→ 継続観察が必要



2020年11月14日の温度推移

5. 今期の主な活動

▶ 定期的集まりセンサを作成

- ▶ 現地訪問: 計6回
- ▶ 現地状況確認
- ▶ 中継器とセンサの設置・調整

▶ データ蓄積開始

- ▶ 3月~4月の霜発生状況の取得
- ▶ 畑による環境の差異の確認

▶ 中継器の増設

- ▶ 2段目, 3段目の設置
- ▶ 目的の畑のセンサのセンシングが可能

▶ 子機の増設

- ▶ 温度センサ: 5台
- ▶ 温度センサ+土壌水分センサ: 5台

▶ 温度センサキャリブレーション

- ▶ 低温時でのセンサ間の温度差を調査

▶ 920MHz帯の通信テスト

- ▶ 試作機作成
- ▶ RSSI値(受信信号強度)
 - ▶ 最低値: 121
 - ▶ 最高値: 132
 - ▶ 平均: 125.3 (125程度以上でOK)
- ▶ 高低差がある畑にも中継器経由せずセンサを設置可能と確認



地表温度・土壌水分センサ子機



テストした地点と高低差

6. 今後の予定

▶ 920MHz帯を利用した親機・子機の作成

- ▶ 機種選定済み (IM920 (Interplan))
- ▶ 中継器無しで離れた畑をカバー

▶ ユーザインターフェースの充実

- ▶ ユーザがいつでもどこからでも確認できる
- ▶ 温度推移などを
- ▶ 霜予測や・散水に活用してもらう



IM920

大学等による「おおいた創生」推進協議会 実践型地域活動事業

大分市域における新たな観光スタイルを提案する 観光支援ツールの構築

諸岡蓮, 太田圭祐, 川畑千奈都, 重盛さくら, 熊埜御堂祭,
福岡宜幸, 定本孝太郎, 日高大地, 平井秋良, 賀川経夫
(大分大学 理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース)
協力: 大分市観光課, おおいた魅力発信局

背景・課題

以下のような理由により, 大分市の観光地としての総合的な評価は高くない。

1. 大分市は, 元来, 産業都市としての色合いが強く, 出張や他都市への経由地として市を訪れる人が多い。
2. 大分市域周辺の著名な観光地である別府市や湯布院(由布市), 阿蘇周辺と比較される。
3. SNS等の利用が一般的になり, 観光客のニーズが多様化している。

プロジェクトの目的

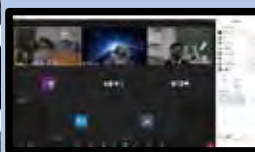
観光客の多様なニーズに対応するIT技術を応用した新たな観光支援ツールの設計・構築

実施内容

観光シミュレーション・勉強会

大分市域の観光に関する問題点を分析するために以下のような調査を実施しました。

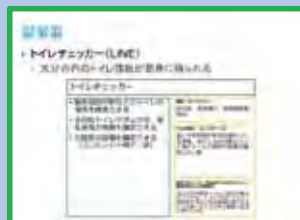
- (1) 大分駅を起点として上野丘地区の史跡を巡る散策を行い, 気づいた点を問題点として集約した。
- (2) 大分市観光課や観光案内所などに出向き, 現場の方のお話を伺った。
- (3) 大分市におけるオープンデータの利用に関する取材, オープンデータに関する勉強会を実施した。



オンラインアイデアソン

プロジェクト内でいくつかのグループに分かれてそれぞれアイデアを出しあい, アイデアソン形式で観光支援アプリの提案をおこなってもらった。大分市観光課など大学外部の方にも同席していただき, オンラインで発表会を実施したところ, 以下のようなアイデアが提案された。

- ・ **利用者の状況を踏まえて観光案内を行うツール**
食事でどこに行けば良いか悩んでしまったときに, 簡単な質問をもとに判断して, いろいろな場所を提案する観光ツールを実現する。その際に, 食事だけでなく, 史跡やアクティビティも含めて紹介し, AR(拡張現実感)技術を使って, 道案内をするなどの手法も検討する。
- ・ **トイレや駐輪場の案内ツール**
大分市が挙げている上野丘近辺の史跡は古い住宅街の中に多く存在するため, トイレや自転車の駐輪場が少なく不便である。それを少しでも解消できるような案内を行うツールを, 使いやすさや電力消費量, ネットワークのトラフィックを考慮し, 既存のSNSを利用することで実現する。



まとめと今後の課題

観光の大きな目玉となるものが少ない大分市域で観光を促進するには, 食やアクティビティ, 史跡などの観光スポットを利用者のニーズに合わせて適確に提示することが必要であるということで大分市の方々とは活発な議論を行うことができた。

今後は, 以下のようなことに取り組んでいく。

- ・ 様々な年代や嗜好の方々を対象とした観光に対するニーズの調査・分析
- ・ 実際のアプリケーションの作成と運用試験



大分観光バーチャル体験プロジェクト

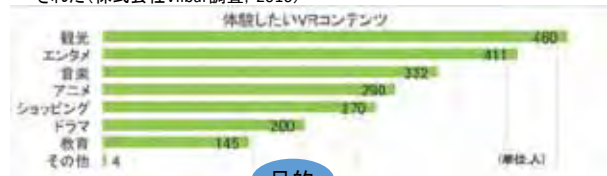
(VRのデモがありますので是非、体験して下さい！)

大分大学 大学院 知能情報システム工学コース
山本剛士
理工学部 知能情報システムコース
梶川亮太, 姫野祥智, 光来出忠斗, 吉田悟



概要

- 様々な分野からVR技術に注目が集まっている
VR(バーチャルリアリティ): 人間の感覚器官に働きかけ、現実ではないが実質的に現実のように感じられる環境を人工的に作り出す技術の総称
- 近年、VR技術が手軽に体験できるようになった
例) PlayStation® VR、VRお化け屋敷、youtube
- 20代~60代までの男女1,207名を対象にVRに関する調査を行った中で最も体験したいVRコンテンツは「観光」であるという結果が発表された(株式会社Viibar調査、2016)



目的

VR + 観光 + 大分

大分大学でのVR技術の研究を生かして
大分県由布市の観光スポットを対象とした
大分観光バーチャル体験コンテンツの作成

由布市役所の方との意見交換

参加団体

- 由布市役所様
- 湯布院フローラルヴィレッジ様

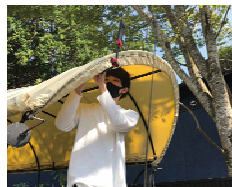


9/15活動計画打ち合わせ

- Zoomによる打ち合わせ
- 由布市について
- 撮影イメージの話し合い

11/6 進捗報告会

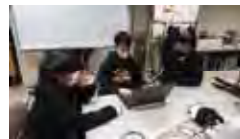
- VR動画の視聴
- 3~5分の動画にまとめる
- 環境音の付与
- 作成したコンテンツの利用方法



VRコンテンツ編集

- 必要な場面の抽出
- 動画の作成
- Youtube用VR動画への変換

作業風景



打ち合わせ風景

- テロップを挿入
場所のイメージがしやすい

観光地向けコンテンツ



湯布院の撮影

辻馬車



自転車



グリーンスローモビリティ



辻馬車、自転車、グリーンスローモビリティ、徒歩による移動方法ごとの様々な視点で湯布院を回る動画を撮影

VRコンテンツの利用



- 撮影した映像を編集



- Youtubeなどのインターネット上のVR動画が見れる場所に掲載
- URLを利用者に知らせる



- スマホをVRゴーグルにセットすることでVR動画が視聴可能

- 利用者にwi-fiなどを使って動画を再生してもらう

湯布院TICや道の駅での利用を検討いただいている

お試し版動画URL
<https://youtu.be/fCbzcMPfDro>



Instagram QR

VR撮影機材

全天球映像用カメラRICOH THETA S,V
スマートフォンでの遠隔操作にて録画を行う



THETA S



THETA V



THETA Z1

実践型地域活動事業

過疎化・高齢化地域の観光まちづくりにおける交通問題の検討—宇佐駅を核としたシェア・モビリティ事業の展開—

- 地域貢献について学びを深めたいと思えるきっかけとなった。
- とにかく楽しかった。宿泊することで綺麗な星空を見上げることができた。
- 早朝からのミカン狩りはとても楽しかったし、お土産としていただいたミカンは美味しかった。
- 移動の問題を直に体感し、未来のまちづくりについて深く考えるきっかけとなった。

避難所の間仕切りシステム開発・制作ワークショップ in 杵築

- 新型コロナウイルス感染症により避難所のあり方が変わっていく中で、地域の方と避難所のあり方を考える機会となった。
- 避難所での不安・不満がこの取り組みを通して実感できました。
- 地域と関わることができて、自分自身も成長することができました。
- 自分の作品を実際に運用する目線で意見交換できたことが良かったです。

建築学生のモノづくりによる大野町「ふるさと体験村」の魅力創出プロジェクト

- 施主から求められていたもの以外にも必要だと思うものに自分なりに考え行動できたことにすごく貢献できていたと実感しました。
- デッキを作りながら、地域の方とも協力、交流し、また、自分たちも楽しみながら作業をすることができた。よくなったデッキを誰かが使ってくれるのが楽しみです。
- 参加する人や地域のためにもなると思うので続けてほしいです！

舞子浜緑地リビング化プロジェクト

- 「舞子浜」という場所を知れてよかったと思いました。また、直接参加している人たちと自分たちが考えた企画・イベントをすることは、こんなに楽しいことなんだとわかりました。
- 地域貢献へのやりがい得到了らと思います。今回だけでは終わらず、これからも貢献していくことが大切だと思いました。

地方創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト

- 映像制作のスキルや大分の企業について知ることができ、深く理解が深まりました。
- 自分自信を見つめ直したり、地域と企業の関係性等知ることができました。

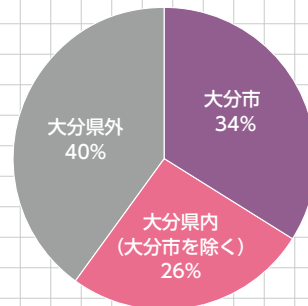
島しょ地域における水産物の多角的視座による付加価値の創造（中小養殖業者による水産物のブランド化）

- 養殖ブリの種類や地域活性化させる考え方を学ぶことができた。
- 地域を活性化させることの苦労や大変さを学び、自分はどうか動けばよいのか考える良い機会になりました。
- もっと地域のことを知りたいと思った。

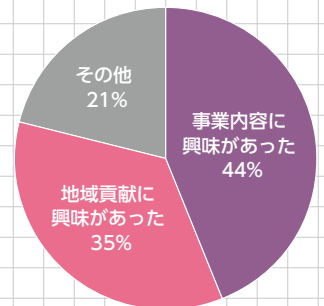
玖珠町活性化のための玖珠町産大麦の認知拡大・利用拡大プロジェクト

- うどんを作るのは楽しかったので、玖珠町の幼稚園児と大麦粉を使ってうどん作り体験とかどうでしょうか？子どもの親御さんも大麦のことを知ってくれと思います。
- 今回、玖珠町の大麦を題材にパッケージ制作に携わりましたが、こういうことははじめてだったため、依頼主の条件を聞き、それをデザインするという難しさを痛感しました。

Q. 出身地はどこですか？



Q. どのような目的・動機で参加されましたか？



野津原方言調査会と学生との学術的交流機会の創出 ～『野津原方言集』1～15巻の電子テキスト化による大分方言のオノマトペ研究を通じて～

- 自分自身の地元の方言についても考えてみたいと思った。
- 今まで方言について学んでも、その地域の方々に直接疑問をぶつけたり、お話を聞いたりすることはなかったので興味深い経験をさせていただきました。また、このような機会がありましたら今度はぜひ現地に行って対面でお話をしてみたいと思いました。
- 野津原方言集を電子化していく中で、自分の知らない方言や歌など、様々なことを新しく知りました。また、野津原の方言だけでなく、文化や問題点なども知る機会になり、とても充実していたと思います。

大学と駅と地域デザイン

写真をとりたくなる駅プロジェクト（別府駅）

- 「鬼」をテーマにした作品作りは「別府らしさ」と「別府の味」をアピールすることにおいて有効的だったと思います。
- 美術系の分野を学んでいる身としては、非常に良い機会をもらえたなと思いました。今後に生かしていけたらなと思います。本学を卒業後も、アートや何らかの形で別府・大分・別府大学に貢献出来たらと願います。

発酵を利用した新規加工食品の開発

- 自分たちが作ったものは、まだ他の人がやっていない初めてのもので、そして、それが広まっていくと考えたらすごくワクワクした。
- 試食の結果、完成度の高い味噌ができて、これまでにない新しいものを創造しているという充実感を味わった。

おんせん県おおいた 魅力発信コンシェルジュ養成啓発事業 九重発！ 大自然と里山に沸く温泉を満喫

- メディア・媒体を通してしか知らなかった現地の土や木・水・空気・人に会いその生き様、息づかいを直接見て、触れて、感じることができた。
- 九重町の魅力、温泉施設（民泊含め）SNSを通じ観光情報発信していきたいと思う。

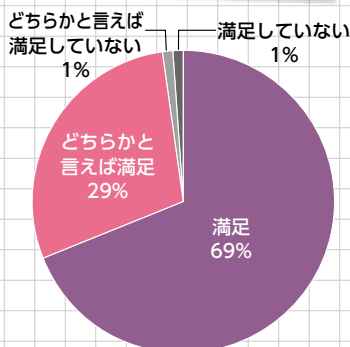
「豊の七瀬柿」PR大作戦

- 学内以外で販売をした事は大きかった。マルシェとかに出店してドライ柿の事をアピールできたのは良かったと思います。
- 体験したことで、その地域での活動や農作物（柿）に対して、愛着が高まった。
- 子どもたちが参加できるような体験も増えれば良いと思います。

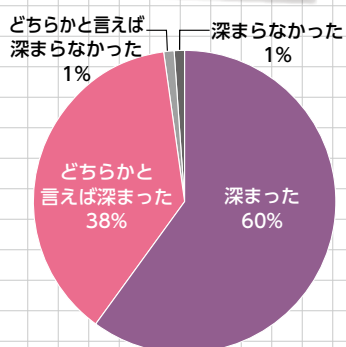


参加学生アンケート 集計結果

Q. 事業に参加しての満足度を教えて下さい。



Q. 地域への理解は深まりましたか？



おおいたのもったいないを考える。

～SDGs持続可能な社会の実現に向けて私たちができること～

- 大分県の周年野菜の中で廃棄される部分を利用し、スイーツを作成した。老若男女に試食していただき、年間を通して提供できるもの開発に取り組んだ。
- 一人ひとりがこつこつと向き合い手を取り合うことで必ず変えられると信じている。
- 社会的問題に向き合い、知ることができ、今後の生活の上で意識できるようになった。

大友宗麟ゆかりの西洋文化とその後の行方

～長崎・生月島の祈り“おらしょ・歌おらしょ”から豊後キリシタンの実態を探る～

- 自分では訪れることがなかった場所へ行くことができた。
- 大分の歴史の中に、自分の知らない事実がたくさんあることに感動した。

大分の輪を広げよう

～給食施設で産地地消を取り入れるためのレシピ開発～

- 特産品からどのような料理を作るかのきっかけとなった。
- 多くの方が参加し、良いアイデア作品が生まれた。試食もでき、美味しかった。

高校・大学・自治体連携および文理融合による交通まちづくりプロジェクト—豊後大野市三重町駅前活性化と公共交通通学促進にむけて

- 活動を通して自分に縁のなかった地域の未来について真剣に考えることができ、本当に良い経験になりました。
- このような経験が若いうちからできたのは、幸運なことだと思います。高校生や住民の方と楽しく交流もでき、とても良かったです。ありがとうございました。

小学生のためのプログラミング教室 in 日出町

- 小学生が自分たちよりもプログラミングに関する知識を持ち、関心を持って取り組んでいることや、プログラミングの技術の高さに驚き、刺激を受けた。
- 地域の公民館を利用することで、地域の方々や公民館の職員さん、地域で行われているイベントや行事とふれあえる機会をもてた。

きたく部2020新展開

- スフィロボルトがあったことより、プログラミングに関連するゲームもあればおもしろいと思った。
- 多くの児童と関わることができ、良い経験になった。活動の運営等にも関わり、学べた。
- 参加してみたことで、教えることの難しさなどを実感することができた。また、初めて会う子供達と接することで自分の対応力などの向上にも繋がった。
- 母も地域ボランティアとして参加したいと言っていました。

県産木材を利用したものづくりワークショップの実践

- 子どもたちの笑顔が見れて嬉しい。
- 新たな視点からものづくりを見ることができた。
- コロナ禍でなかなか大人数の作業の場が取りづらいですが、今後機会があればぜひ参加したい。

のつはる天空広場活用プロジェクト

(高度化教養科目① 地域ブランディング)

- この授業を受けることで地域の課題解決の難しさを知ることが出来た、これからもこのような授業に積極的に参加してゆきたい。
- コロナ禍ではあったが、他の人と顔を合わせて面と向かって取り組めた数少ない講義だったので、非常に有意義な時間だった。
- 大分県のことについて知らなかったことをたくさん知ることが出来た。自分が人前で話すことが出来るというスキルが高まったので良かったです。
- 自分の成長に繋がるよい経験でした。引き続き「おおいた共創士」を目指して意欲的に取り込んでいきたいです。

「道の駅ゆふいん」の改修にともなう地域活性化機能の強化プロジェクト (高度化教養科目① 地域ブランディング)

- 意見の違う人と一つのモノを作っていく難しさが、楽しくもあり、自分の力になったと感じました。
- 他学部の学生や先生・行政・企業等普段なかなか関わることの無い人との関わりが多く、自分の視野が広がった。発表までの準備は大変なものであったが、やり終えた時の満足感が大きかった。

無線センサを用いた圃場モニタリング

- センサを自分たちで開発することで、配線や動作の仕組みを知ることができてよかった。
- 学んでいる分野で地域に役立つことができるという実感を持つことができました。ありがとうございました。

大分市域における新たな観光スタイルを提案する観光支援ツールの構築

- コロナの影響でスケジュールの調整が困難となり、オンラインでの実施となったため、いまひとつ消化不良となったことが残念です。
- できればもう少しやりたかった。

大分観光バーチャル体験プロジェクト2020

- VRを用いた地域の情報発信の方法について地域の方と一緒に取り組めた。
- 事業を通して地域に貢献できるということはとても気持ちの良いことだし、地域の人達に感謝された時の満足感は何物にも変えられないと感じた。

2020年度 地域活性化事業報告会

日時▶令和3年2月27日(土) 13:30～15:30

会場▶オンライン

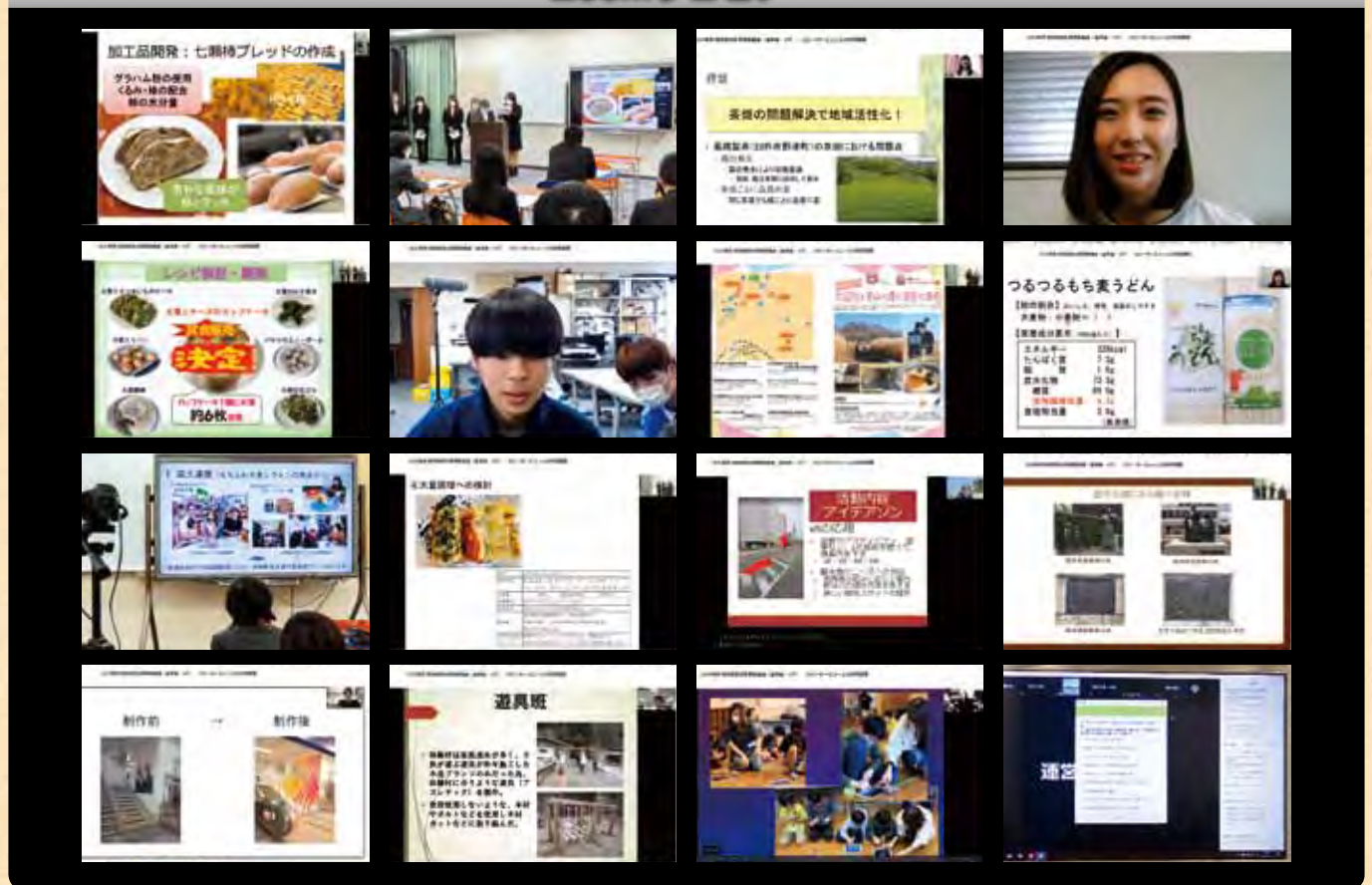
令和3年2月27日(土)、地域活性化をテーマとした学生の実践型地域活動事業の報告会を新型コロナウイルス感染症の流行に配慮し、オンライン(Zoomウェビナー)で開催しました。5つの大学等において実施した24の事業を2つのグループに分け、同時配信しました。視聴にあたっては、事前の登録をおこない、見ることのできなかった事業の報告を後日視聴できるようにし、緊張の中で研究室、ビデオ収録室、自宅からの配信となりました。途中トラブルもありましたが、無事報告会を終了し、最後にグループ毎に視聴者投票を行いました。報告会で発表した皆さん、視聴頂いた皆さん、たくさんのご協力ありがとうございました。

来年は、新型コロナウイルスも終息し、対面で実施できることを祈っています。



A

Zoomウェビナー



👑 A 視聴者による投票結果

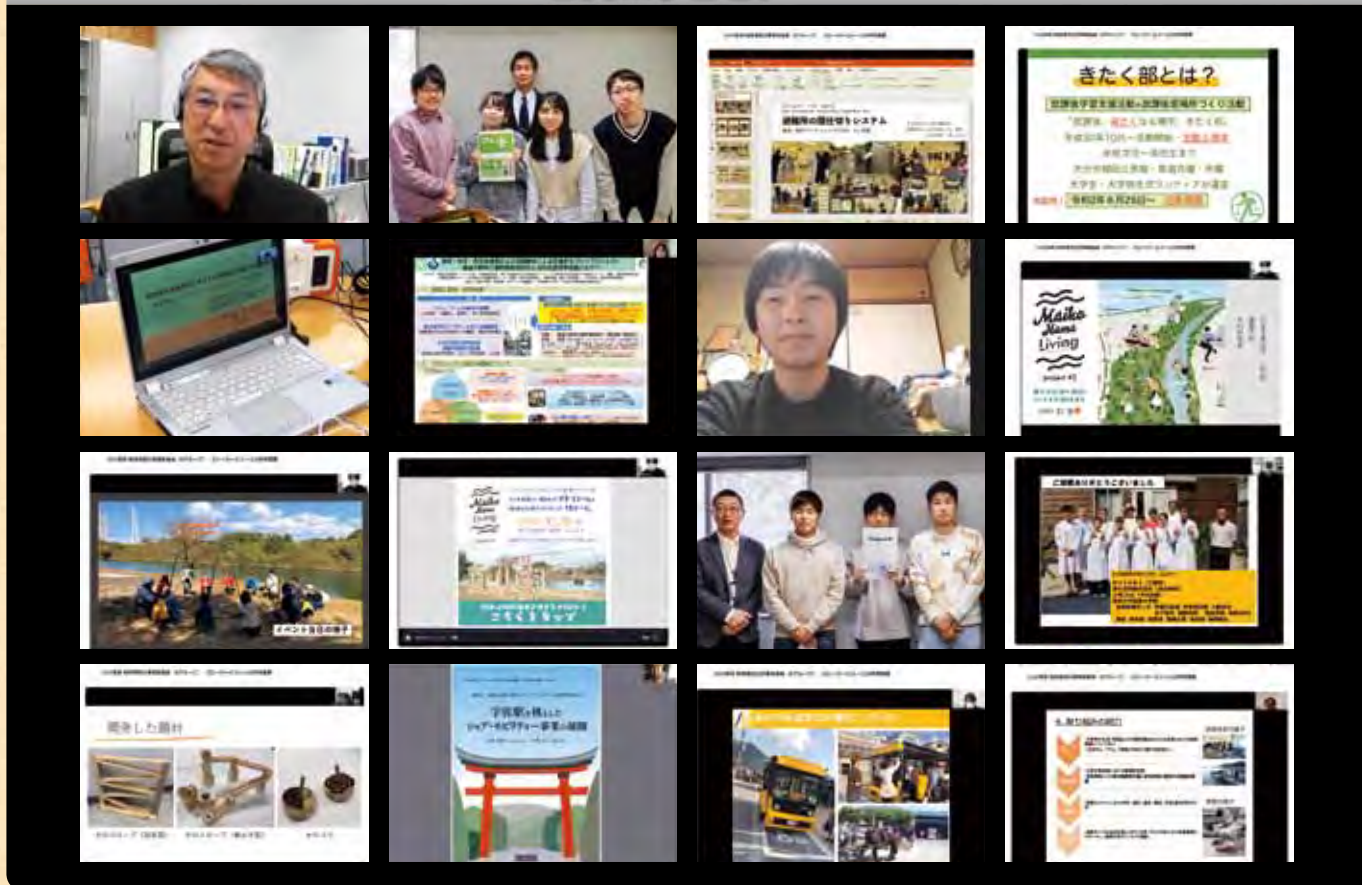
結果	事業名	担当教員	掲載ページ
1位	無線センサを用いた圃場モニタリング	大分大学 大竹 哲史	25
2位	「豊の七瀬柿」PR大作戦	別府溝部学園短期大学 土谷 知子	15
3位	おおいたのもったいないを考える。 ～SDGs持続可能な社会の実現に向けて私たちができること～	別府溝部学園短期大学 牧 昌生	16
3位	大学と駅と地域デザイン 写真をとりたくなる駅プロジェクト(別府駅)	別府大学 安松 みゆき	12





B

Zoomウェビナー



B 視聴者による投票結果

結果	事業名	担当教員	掲載ページ
1位	避難所の間仕切りシステム開発・制作ワークショップ in 杵築	日本文理大学 近藤 正一	5
2位	「道の駅ゆふいん」の改修にともなう地域活性化機能の強化プロジェクト (高度化教養科目① 地域ブランディング)	大分大学 岩本 光生	24
2位	大分観光バーチャル体験プロジェクト2020	大分大学 古家 賢一	27



実践型地域活動事業のひとこま



■お問い合わせは

大学等による「おおいた創生」推進協議会 高等教育活性化部会 事務局

学校法人文学学園 日本文理大学 大学事務本部 大学企画業務担当
〒870-0397 大分県大分市一木1727

TEL : 097-524-2658

E-mail : regionalwg@nbu.ac.jp

